

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別授承認雜誌第三五二號
昭和二十六年十一月廿五日印刷
昭和二十六年十二月一日發行

第十七卷

第十一・十二合併號

浄土

十一月十二月合併號

寂びに徹して

吉田絃二郎

永遠のいのち

佐藤良智

彌陀の存在について

松濤誠廉

辨榮上人

中島眞孝

1951

11.12.

新しい飛躍のために

先日愛讀者から手紙が來た。それに曰く、婦人雜誌の十二月號が十月半ばに本屋から届いた。それと同時に本誌の十月號が配達された。これをみて家の子供さんが「お父さん何故片ぽが十二月なの」と訊ねたとのことである。

季節を無視して、たゞ競争のためにのみ一日でも早く出そうとする營利主義には感心出來ぬが、といつてその月のせめて當初、出來れば前月末までにはお届けしたい。月刊の月刊たる所以は季節と時事とに鋭敏なるためであつて、月中から月末にかけての發行では全く興ざめてしまう。

本誌の遅刊の原因は電氣事情、經濟條件その他色々多い。がそれをこゝにいくら並べてみたところで、他の雜誌が現にどんどん出ているのでは文句なしに宛を脱ぐより仕方ない。その上今回は合併號、何とも申譯けない。ただ讀者の賢察を俟つのみ。

合併の所以は、これを以つて一月の時を稼いで、新年號を平常に復して十二月中にお届けしたいためである。大部お叱りの言葉も頂いているが、何卒寛容と愛護の精神を以つてしばらくの推移を見守つて頂きたく、本來後記に書くべきを、卷頭に述べて、來るべき新しき年、新しき世への飛躍をお約束する。(竹中)。

目次

彌陀の存在について	松濤誠廉(7)
永遠のいのち(二)	佐藤良智(16)
經典と私	眞野龍海(13)
懺悔の心	新保義道(19)
いのちの夜明	(1)
寂びに徹して	吉田絃二郎(2)
辨榮上人	中島眞孝(25)
「淨土」有縁の現地報告	藤井實應(4)
阿波介の舍利塚	昆野秀賢(11)
一向上人	大橋俊雄(22)
芝園だより	

いのちの夜明

人々は「いのち」というものを寶石か財産かの如く、自らに與えられたるもの、自分の手にしつかりと抱きしめたるものの如くに考え、その一日一日と滅し、滅り行くのを徒らに惜しむか、燃えさかるそのほのほの中に惑溺するか、そのありのままなる姿を見究めようとはしない。

いのちとは、屢々、點ぜられた灯火に譬えられる。燃え去り燃え來る^{ほのほ}焰にはうつろいなくとも、その焰をして燃立たしめているものは念々刻々にうつろい流れる。焰は實體とみえて假象である。あるとみえて空なるもの。いのちもまたまた斯くの如く、いのちなりけりと抱きしめても、握れる砂のさらさらと指間を滑り去る如くに洩れ消えてゆく。空に描かれた虹、手にくめる水、空の空たるもの、これが「いのち」。

いのちの焰は刻々の燃焼である。諸行無常萬物流轉。而も燃えつつも焰そのものはそこに現する。いのちはいのちされる限り、いのちとしてそこにある。常住不滅。

かく、なくしてあるもの。ありつつも而もないもの。それを「ある」ものとして、或は「ない」ものとしていづれかに思い取るところに、あれば失わざらんと欲と惱みを、なければあらんと欲^{むさば}りと悶えとが芽生える。いのちのありのままなる姿を見究め得ざる無明がこれである。暗い「いのち」の夜がつづく。

無明によるいのちの悶えは苦となりて、人の世に現する。苦を苦と知るには、苦の原因を知るには、原因を滅し去るには。すべていのちの實相に立ち入らねばなし得ない。

いのちの實相に立ち至つて、自らのいのちが、ある如くにしてなく、なきが如くにしてあるその様を掴みとり、有無相即の世界を建設する時、人は始めて眞實に生きる人となる。

有無は兩極である。有でもなく、無でもない。その中道に立つて而も兩極を離れたる道。これがいのちに具現する時は「八正道」となり、佛の道となる。

人間ゴータマ、いのちに悩める人の子ゴータマが、深い思索の淵に沈んで、菩提樹下に四十九日をすごした曉、思いここに至つてふとまなこを東天に上げれば、いのちの星一つ燦として輝き、ここに「いのち」の夜はその幕を開いたのである。時に西歴紀元前五三一年十二月八日。釋尊三十五歳のことであつた。(S・T)



寂 び に 徹 し て

吉 田 絃 二 郎

このあいだから終日庭の木立に来て、ひたきが鳴いてゐる。ひたきの澄み透つたような静かな聲を聴けば、ふかまりゆく秋を感じないではをられない。鳥にも四十雀のやうに梢のてつぺんにとまつて賑かに鳴くものもありほととぎすのやうに空を飛びながら血を吐く思ひに啼きわたるものもあるが、ひたきはいかにも秋にふさはしく木立のなかに隠れて、寂びに徹した鳴き方をしてゐる。

今朝はまた鶯の笛鳴きを聴いた。笛鳴もまた秋の寂びに徹した幽韻をこめてゐる。わたくしは、いかにながいこと、ひたきの聲を、笛鳴きの聲を待つてゐたことであらう。その寂びに徹した聲を。

わたくしは、ふと離房の窓をあけた。そこには秋の日さしを浴びた落の花が黄金のやうな美しい色を見せて咲いてゐた。落の花も寂しい花である。いぶしたやうなその黄金色は寂びに徹したものゝ尊い光りを聯想させる。

ふと、氣が付くと、あちこちの庭の隅に山茶花が咲き畑のかたはらにはコスモスが咲き、茶の花が咲いてゐる。こゝにも寂しい花がある。寂びに徹した花がある。またわたくしは庭の隅に立つて、朝毎に手のひらいつぱいの椎の實を見つける。椎の實も寂しいものだ。寂びに徹した味だ。

椎の實を拾つてゐると、わたくしは故郷の山を懐ひ出す。そこにはほろ甘い櫟の實がなつてゐた。櫟の實は細長くて、くゝり猿のやうな形をしてゐた。そして、胴軀にあたるところが赤くて甘く、ちよつと菓子のはまのやうな味を持つてゐた。その頭にあたるところは青い球のやうな形をしてゐた。

菓子というやうなものにめぐまれなかつた貧村の子供たちにとつては、さゝ栗、椎の實、櫟の實は、来る秋毎に待たるゝ山の幸であつた。

昨日今日武藏野の片隅に椎の實を拾つてゐると、あのころの寂しかった母の姿が泛かんで来る。母は信心深い人であつたが、あまりに一生涯苦勞をつゞけたためか、晩年には時折り、長い過去を振りかへつて溜息をついてゐたこともあつた。五人の子に先立たれた母は三十年が間ほとんど一步も外へ家を出なかつた。母はかつて一度もわたくしを叱つたこともなかつた。

寂びに徹した秋は人をしていろいろなことを思ひ出させる。

近くの木立で鳥が鳴いてゐる。鳥はさわがしいものとして、また時としては凶事を告げるものとして忌み、きはれるものであるが、秋もふかく、大氣も澄むころになれば鳥の啼き聲もあはれさを誘ふ。李太白の詩「黃雲城邊鳥欲棲。歸飛啞々枝上啼」を思ひ出させる。

喧騒な鳥の鳴き聲も晩秋になれば寂びに徹したものと、芭蕉翁をして「枯れ枝」の名吟を遺させた。

晩秋の天地は一切の不純を淨化し、一切の雜念を拂拭して、たゞ澄徹靜寂の一念に住せしむる。

西行法師に

わきて見む老木は花もあはれなり

今いくたびの春にあふべき

といふ歌がある。さくらの花にとりては「今いくたびの春」が問題であるが、わたくしにとりては「今いくたびの秋に逢ふべき」といふ歎きや、希望の方が強い。秋ほど寂びに徹した季節はなく、秋ほどわたくしたちの俗念を純化してくれる季節はない。秋ほどさまざまのことを思はせてくれる季節はない。だからわたくしは幾秋も生きてゐたい。

鳥の生態を見てゐると、ほとんどすべてが外部の大氣に支配されてゐるやうに想はれる。わたくしは信濃の高原で十一月三日に鶯の谷わたりを聞いたことがある。空は霽れて、春のやうな溫かさで、陽炎でも立ちさうな日であつた。鶯は鳴きに鳴いた。

わたくしたちの心も、これに似たものを持つてゐる。

芭蕉翁に

愚案するに冥途もかくや秋の暮

菊の香や奈良には古き佛たち

といふ句があるが、芭蕉も秋になればしみじみと來世のことを思ひ、菊かをるころになれば取り分けて、奈良の古い佛たちの御姿を一層なつかしく感じたものであらう。

「浄土」有縁の現地報告

藤 井 實 應

竹中信常さんから「巡教の折々の現地報告を書くように」との仰せがありました。私は有縁のまゝにあちこちと招かるゝまゝに巡らしてもらつてをります。必ずしも「浄土」宗に限つたことはありませんが、やはり「浄土」有縁の方々と思いますので出来るだけありのまゝに御報告申上げることにして責を果したいと思ひます。

○ (九月二十日) 国立豊橋病院例月講話。今日は法句經一八八—一九二を中心にお話。要するに三歸四諦の教である。座談の時には「往生」「いろは歌」などの質問や話題が出、

今迄佛教を誤解していましたが、今日私共病人の心得をお説き下されていたのでしたかと、よろこびの感想を語られた方もある。この病院へ来るのは、今回で満二ヶ年、毎月一回づゝ來たわけで、皮膚科の小笠原登先生の特別なる御懇志に基く。先生は佛大教授小笠原秀實先生の御令弟で長く京都にてレブラ患者の診療に従事せられレブラ研究の大家で停年をやめて豊橋に來られたので、尼衆校の寺森教山老尼の御紹介ではじめて先生にあひ爾後二十數回毎月病院へ來ることになった。あう毎に先生の佛教信念による高潔な人格に頭が下

る。聴者は小數であるが皆病苦に當面しておられる方々として眞剣な求道心をもつておられるので自然に話にも實が入つてくる。二年間殆ど缺かさず來て世話して下さる人もあるが大部分の人は退院したりして變つてゆく。病める人々が明るく養生してゆかれるようにと祈らせられる。

○ (九月二十二、二日) 愛知縣碧海郡依佐美

村野田昌福寺(住職八木善祐師)彼岸説教。

二十一日には婦人總會も兼ねて行われた。拜む生活に就て語る。後に野々村氏の影繪釋尊傳のお話があつた。影繪も新しい傳道方法として一層研究され普及されたいものである。二十二日は四修の話。此地、西三河といえは念佛信仰の熱心なところで有名であるだけにたくさんのお参りはあつたが何といつても青壯年の人は少い。少年や青年の集りは別途に考慮されねばならぬが、年中行事の彼岸にも青少年の集りがほしいものである。住職は現在浄土宗庶務部長として時局重大の時に活躍せられている。お寺の方と兩方でお氣の毒なほどお忙しい。二十一日夜宗門の現在將來について語りあうことができた。

(九月二十三日) 豊橋市榮昌寺(住職寺田

義天師)彼岸會、英靈供養、婦人會等かねて行われる。參聽者は婦人が多い。「正しい信仰」「念佛の生活」を語る。寺田師は吉田方の先生で、舞踊の研究家、その方面に種々活躍せられている。

(夜) 豊橋市高須區婦人會講話「人生問題と信仰」共生同人木邊與一君案内してくれ。區長伊藤武雄氏いろ／＼お世話下さる。豊橋市というもの、豊川の河口で海岸に面した全くの農漁村である。今迄婦人會では宗教のお話は聞かなかつたとのことであつた。木邊君の自轉車を拜借して十一時頃歸宅。

(九月二十四日) 愛知縣知多郡豐濱町南知多療養所(所長田中義邦先生)午後六時半より約一時間講話。この前の講話のつゞきで三惡中の修惡について語る。今回は餘り質問が出なかつた。所長奥さん田中いと様は愛知縣會議員として御活躍、久しぶりにお目にかつたので話が盡きない。いろ／＼の御體驗談十二時過迄聞いた。親切と實意は如何なる世界にも尊ばれる。田中さんのような議員のみであつたら、どんなに政界も明るくなるだろうと思つて今後の御活動をお祈りした。所長田中先生は結核療養の面に専心努力、最近は結核療養の實習會等も催されて積極的に結核

豫防の運動も進められている。こゝでは毎朝患者の人達は講堂に集つて「共生のつとめ」拜誦、所長さんから一席の講話がある。所長さんの明るい朗らかなひろやかな御態度で患者さん達も自然に明るい大きなおちつきが與えられる。結核の療養には精神の安定が實に重要であると教えられる。

(九月二十五日) 朝、療養所で一所に「共生のつとめ」終つてから所長さんから「極樂」について十分間だけ話をしてくれとの注文、突然のことゝて不充分ではあつたが、ともかくも一應肝要な點をまとめて話ができてうれしかつた。雨のひとしきり降る中をバス、及電車にて半田市へ。

(午前) 十一時より半田市小栗三郎様お宅にて清和塾生徒(二十歳前後の娘さん達約六十名)「拜むということ」の話。(午後)半田佛教會員へ講話「五眼について」夜は小栗商店店員の方々に「人生に於ける諸問題と信仰」について語る。小栗さんのお家は眞宗であるが、近頃の眞宗のお説教にあき足らず各方面に道を求めてをられたが、最近光明會の別時念佛に参加して大に感ぜらるゝ所あり、山本空外博士、佐々木爲興師等をお招きして自宅にて教誡を開かれ近隣の方々にもめぐみ

をわけられている。御先祖代々佛教篤信の舊家で、現在のお家も前代(當主の尊父)が建てられたのであるが最初に佛壇佛間を造つてそれを中心として家を建てられたのだという實に立派な佛壇佛間がある。佛教界の名士何宗を問はず此家に招待しては佛縁を深められた。その爲近代佛教名士の書畫がたくさんに藏せられている。大島徹水僧正はよく自分の家のように時々突然遊びに來られたとの事である。書畫帳を出されて記念に筆をといはれて閉口する。やむを得ず慈心相向佛眼相看と惡筆で汚した。夜泊る。

(九月二十六日) 夜、名古屋市建中寺(住職椎尾辨匡僧正)名古屋共生例會、雨盛んに降りたる爲集るもの少數、しかしこの雨中の中を大垣の一川傳四郎二人が出席、加藤千代子さん、丹羽覺一氏小出權十郎氏、菱田徹立氏等出席し、「全國共生結集より歸りて」を語つて後座談。無我の積極的意義や、椎尾先生のお徳などについて種々話がでる。よき人のよき話をすることは何といううれしくも有難いことであらうか。又自分の親しきものに信を傳えんと願うときは「念ずる」ということが、大切であることの實例など語りあう。又人生の矛盾と信仰に就て眞剣な討議も行われ

た。

又佛教文書傳道の大切なことに話が出て、その文書にも英語があると青年達も讀むという。この秋名古屋佛教青年聯盟にてトラクトを配布したが、彼岸運動につき *Permitta Movement* と標題に記された、これがたいへんよかつたとの話である。なるほど「お彼岸運動」というのでは感じがちがう、若い人には一層生ずることであろう。今後の佛教文書傳道にも一應心得ておくべきことだ。少數の眞面目な集りはまた格別趣があり、教えられる。

(十月二日、火) 静岡、華陽院、日吉保育園(堀田良謙師)に夕方着。その途中静岡の街頭で、興津一弘君に會つた。名古屋鐵道教習所で教えたことのある人、この前五月に静岡へ來た時も街で偶然に出會つたので「君とは餘程因縁が深いよ」と語つた。教習所を出てから静岡驛の改札掛をつとめ、今は静岡管理局の庶務に勤めているとのこと、世の中にでてみると、勤務の上で人と人との間が實にむづかしいものであることが分つてきました。毎月頂く「ハガキ訪問」で教えられ、力づけられますなどの感想。若い人達が、ぐ

んぐと伸びて進んでゆかれることは實にうれしい。

日吉幼稚園へは本年の五月、同園母の會に講話に來たことがあるが、堀田君とゆつくり話しあう時間はなかつた。七、八月の頃、御世話していた律師養成講座に御子息の卓爾、良爾兩君が参加せられたこともあつたりして信仰のを中心になにかと語りあいたいからの要望もあつたので、上京の途、一夜泊めでもらうて語ろうと寄つたのである。奥さんや卓爾、良爾兩君にもあつた、西福寺、みどり幼稚園長の川村悠穂君も通知によつて來訪三人で夜おそくまで語つた。堀田・川村兩君共、昭和十何年の静岡の大火、次で昭和二十年六月の戦災にあつて二度とも焼失の厄にあわれた。堀田君は終戦後逸早く保育園を創められた斯界の先達である。現在静岡では各宗を通じて淨土宗が最も多く幼児教育に従事しているとのこと。堀田君は子福長者で現在八人のお子さんが全部學校へ行つておられる、大學へ三名、高校へ二名、中學へ一名、小學へ二名。それだけで無條件に頭が下る。今日の如き衣食の生活だけでも容易ならぬ時代に教育第一と、御夫婦御そろいで、内外共に教育と教化に精進せらるゝことは誠に聞くも有

難いことである。川村君は戦災の時に、寺も焼け、その上、愛する妻と、子供三人と、両親とを一時に失い、自も大ヤケドをして九死に一生を得た人、絶望のドン底から、立ちあがつて、本年、幼稚園を建設、懸命に幼稚教育に努力せられている。本年五月お寺へ參つた時、涙と共に體驗を語られたことが思い出される。大死一番せられた人にはどこかに底力が生ぜられる、世の執着を超えた一點がうかがわれる。彼の「幼稚園だより」や「カード」などの刷物を見ても、どこか光つてい

る。

三人鼎座して寺院の經營、幼稚園の經營、幼児の教育、信仰のことなど話は盡きない。忽ちに十二時となつて了つて惜くも座談を閉ぢて寢に就く。

藤井師より皆様へ

師は方々を巡られるので、其節なるべく淨土の會員の方を訪問して、相語り、一會を楽しむ機会を持つ事を念願しておられます。御希望の方は當編集部宛、時所道順其他を知らせて下さい。

彌陀の存在について

松 濤 誠 廉

淨土宗の信仰の大切な點で、また同時に最も困難な點は彌陀佛の存在と西方淨土のそれとである。これが確立しなければ本宗の信仰は成立しないからである。

これを考へる前に先づ確かめて置かなければならないことは、本宗の信仰の實質である。彌陀佛とその淨土とは、信仰の實質ではなくて信仰の對象、宗教學的に云へば客體である。實質は、宗祖及び本宗の僧侶が客體を基礎として、作つて吾々に與へた教義に對して吾々が起す「心の動き」とこれを中心として有機的に一體となつて動く生活全體である。客體と教義とは社會の有する「文化財」であるが信仰は自己の有するもので直接には「自己の寶」である。そしてこの信仰が生きている實質で、宗教の價值はこのものに對する價值批判の結果である。

客體及び教義から信仰を作るのは自己の仕事で、こゝにはこの判斷と解釋との自由が自から存在する。最も他律的に教義をうけいれて信仰を起す人の場合に於ても、その入信時の無意識的な解釋或は後に行はれる解釋と斷定とは自己の過去によつて得られた知識であるのであるから、それは主觀性の多いものとなるからである。そして事實に生きている個々の信仰は教義そのものと形は同じでもその

中を流れている血や肉づけは自づと異なるものである。

動く實際面にはそれと異なる運命をもつて居る信仰も、心の動きとして全體的に共通なところがあつて、この共通點がその信仰價值批判の對象となる。またこの點をとらへてなすより外、方法がないのである。

かくして考の對象となり得る淨土の信仰は、信者の信仰意識の主觀に於ては、不斷の口稱念佛によつて、彌陀の光に包まれて一生を過し、死しては淨土に救はれる心理とそれに基づいてなされて行く生活である。そしてその生活の様式は出家の生活ではなくて、現に與へられたるそのまゝの生活形式である。

思ひを現世界ではなしに、はるかに離れた西方に置くと云ふことは、それが確立する時には、これは現世界からの心の離脱である。

覺者圓滿なる慈悲者をあがめその光明に浴するの、自己の有する我意識に基づいて解脱にして圓滿なる覺者を畫いて、我意識に基づいて、起る我執を消却して、一切の煩惱を清めるものであり、更に一方裏面に覺への思慕を強めるものである。

信機は我執を除き煩惱をも捨てるのである。捨の精神を植える。一生を通じての念佛、死後の往生を願ふのは一生を通じての解脱

生活の精進努力を可能ならしむることである。

與へられたる生活を捨てないのは、全生活をあげて解脱生活たらしめんとする大乘精神に合するものである。念佛行者は現實の生活を捨てないにしても、現實生活に信仰以前に附着していた我欲煩惱はない。

政治、經濟的手腕と生活の人にこれを捨てよと云ふのではなくて白道上に立つてその手腕を動かせるのである。

簡単にいへば他の佛教は出家生活によつて離脱、覺の性格、或は覺下意識的なものを作り上げて、これを煩惱にかわつて中心として人間の全意識内容を、有機的に動かそうとするのであるが、信の大乘教は行、及び出家生活以前に或はこれ等と平行して信すべきである内容を與へてこれによつて覺の下意識にかわるべき信の心所を起させ、これによつて全意識を覺的に動かせ、行はこの信を確立強化する爲めに、或はこれと平行して覺の下意識を起さしめんが爲めになされるのである。即ち本宗はこの信の内容として、彌陀と不斷口稱念佛、光明攝取と死後往生の信仰を與へたのである。

佛教に於ける信と覺の意識の内容の差は今後になさるべき最も重大にして興味あり困難な研究題目であらねばならぬ。願はくば新進の研究者が早やくこの點に氣ついて研究を進めて貰いたいのである。その材料となるべきものは佛教教典の中に山と積まれている。見ようによつてはその大部分がそれである。と云ふことを附加して置く、信と覺とは、信には依りどころがある。形がある。これがこわされれば信は消えてしまふ。

信は他から與へられる場合が多い。迷つた自己の單なる知識的研究によつて構成された信は確信と云へるが佛教の信ではない。佛教

で云ふ信は、覺内容をもつたもので、あらねばならぬから、信なら何でもよいと云ふのではない。覺内容をそなへた人から與られねばならぬ。正邪の信の一つの差別はこゝにある。信は他から形を具へて與へられた覺の響であるとも云ひ得る。これは受けたものが「眞理である」或は「覺への道である」と強く信するが故に、意識内に深く入つて下意識的な作用をなして意識の有機的活動の中心となる、信が猷身的態度を起させるのは覺意識と同様であるが、信が覺と同様下意識的であるためであらう。覺はこれに異つて、解脱行によつてなされる性格の離脱の變換である、離脱無執の下意識の構成を本質とするから、信の如く急には行かない。「頓」は「要素」のある時のみ可能であることがわかる。覺は自力的である。

かく一應考へて見ると、信と覺とはやはり全く異なるものであるが、信が覺的内容と形式を以て居る場合に覺意識と非常に似ることとなる。

「行」によつて作られていく覺の下意識と煩惱の下意識とは相反するもので、兩者同時に意識の中心となることは出来ない。行と正信とに精進する時、前者は意識の中心をなし、その力を増大するが、覺の意志、覺智の批判なしに或は信なしに漫然と世俗生活にひたる時に既に煩惱の下意識は頭をもたげつゝあるのである。煩惱の下意識は單に過去の習慣或は先天的心的要素によつて出来たもの或は先天的の心的要素であるだけでなしに、生理機關とも關係がある様である。

「佛性」「如來藏識」とも呼ばるべきものが先天的に人間に存在すると云ふことは事實でない「覺る可能性」と云ふ漫然としたもの、或は禪定の寂止の意識、心本淨客塵煩惱設種子説などから來た信仰

的假説であらう。然しこの存在を信じて意義なしと云ふのではない。事實この信が不斷に覺性を意識の上に表はして行く。

覺の下意識も、一つには過去の覺的身心の生活の作つた心的傾向と覺に對する智的判斷や信から來る心構え等から出來て居るものかも知れない。従つて覺の意志等の表面意識の存否に従つて覺の下意識の強弱があることがわかる。いづれにしても煩惱の如く性的な基礎はなく、覺者も天台の云ふごとく「修證不斷」にして維持してゐるものである。覺の表面意識の動いていない時、散心のうちに起るものは、覺者に於いても、無記であり、凡人にあつてはこれが煩惱の下意識と結合して煩惱の心となりやすい、これによつて天台に於て假爾の心に三觀を具する解の存在の意義が成り立つのである。

煩惱の下意識は覺の表面意識の全體を無意的部分から始めて破つて行く、表面意識に於ては覺性はかなり永つづきがある、そして表面意識の世界に於て覺の下意識も働きやすい。

煩惱の下意識と覺の下意識とは兩者下意識の状態にある時には交渉關係はない。只一方が強大になると他方が弱小になる。そしてその變化は無意識のうちに行はれる。

かく見ると煩惱の下意識性は覺の下意識性よりつよく、覺の下意識は覺の表面意識によつてさへへられてゐる形である。そして生あらん限り無意志無努力にしてそのまゝにして覺の有機的意識が永久につよく段階はないとせねばならぬ。佛教の不退轉は覺の表面意識不退存續の爲めの生活整理、注意力と努力の確立、行信の確立が出來た故で、覺の下意識が永久に完備したわけではない。

覺の人格を得んがためには、覺の表面意識を盛にせねばならぬことがわかつた、そして行は確實に着々基礎からこれを基きあげるも

ので、信は速に覺的に全意識を動かしむるもので、この兩者共に必要であるが、隱遁出家的な小乗佛教にあつては前者が適し、歴史に示す如く事實この面が發達してゐるが、社會的であり現實を全面的に肯定して解脱の藥籠中に入れんとする、而も彌衆生をその第一目的とする大乘にあつては信が大きな主役をなすは當然で、大乘の行が皆な「信的行」と見られ得るのもこれによるとすることが出来る。

さて信の價值は佛教に於てはその覺的價值、即ち、如何に速かに従つて、容易にこれを信ずるものをして如何に完全なる形に於て（覺考にあらざる以前より）覺者生活を可能ならしむるか、と云ふ點に價值判斷の標準がある。そしてこの價值判斷は科學的に測定さるべきであるが、その効果が上の目的を満足させるならば、その形は必しも科學的であることは必要でない。勿論現代の如く科學萬能の時代にあつては受け入れ安いと云ふ理由で形も科學的であつて、然も覺の効力が充分であれば申分はないのであるが、一、科學者は覺を作り得ない。二、科學的にして効果を失ふ場合がある。三、科學は人間生活、或は人間意識界の全體ではない。

佛陀が醫王にたとへられ、應病與藥が説法の標語の様になつて居る事實から推測しても、信仰概念は藥にもたとへられるべきものでその藥をのむことによつて、人間意識の中に有機的な信仰が起つて覺的生活が起れば信の目的は完成するのである。これに就いて現代の醫學界に於ける新傾向がよい參考になる。現代の新醫藥は「ペニシリン」「ストレプトマイシン」等皆有機的な一種の酵母菌から作られてゐるが、醫學界はこれを科學的に分析しその本質を研究し、説明を試みるより以前に、實地に動物實驗を行ひ、更に臥床實驗を行

つて、實際に治療相當の効果があれば、直ちにこれを用ひていて、科學的説明をまたない。患者の方も、その醫者の過去治療行蹟と藥効を他からきいたのを信じて生死をゆだねるのである。佛教の箭喻經の教へるところと同じではなからうか。淨土の信者も本教の人格と淨土教の救の過去の實蹟とその効果を知つたならば、科學的分析説明をまたずして信行しても決して非現代的ではない。うつかりその道の大家でないものが、科學的な手かげんを加へると、折角の酵母を壊してしまつて無効にする恐れがある。それよりは先づ教祖の人格と藥の効果を知つて服用すべきである。

淨土が西方十萬億土を超へてであると云ふことは非科學的であるがこれなくしては罪惡の充滿する現實世界をそのまゝに認めて然もその上に覺者的の生き方がある所謂大乘道を歩むことは、吾々弱惡に現代人には不可能である。これを信ずることによつてのみ、この大乘の船に容易にのり得るのである。西方淨土は淨佛國土思想の發展或は釋尊在世の理想的時代の更に理想的表現であると一應歴史學的に説明してもそれ故に西方淨土を信ぜよと云ふ理由にはならない。寧ろ先にのべた西方淨土を信ずることの効果を知つてこれを信ずべきである。

その淨土に報身の阿彌陀佛が居られて、念佛するものを今世に守り、後世に救ひたもうと云ふことも非科學的である。阿彌陀佛が釋尊の理想化であると科學的に説明しても、それ故に存在を信ずる理由とはならない。釋尊がとかれたのだから信ぜよと云ふ方が、釋尊の人格を信ずる理由が充分あるが故にまだ信じ安いが、これは在來の教師が取つた方法であるが、これは科學的事實に反する。釋尊の流れをくむ先覺が説かれたことは確實であるから信じよと云ふ方が

まだよいであらう。これは想像、推理要素がなほふくまれている。それよりは法然上人と云ふ大佛教家が説かれたのだから信ぜよ、法然上人はかくかくの人であると云ふ方がより正確であり、科學的である。それでなければ、強い我執我慾につられてこれから逃れることが出来ない。吾々がこれを信ずることによつて、事實、覺的に容易に速かに救はれるのだと信の効果を科學的に説いた方が現代人は信じ安いのである。「金持になる」、「病氣がなほる」と云はれただけで下等宗教を信ずる現代人ではないか、覺と信との研究の現今の佛教に最も必要なことはこれでもわかるであらう。これによつて佛教は隆盛の端著を得るのである。(筆者・大正大學教授)

雀のたわごと

ハワイ・藤花

戦後の日本人は無闇矢鱈にアメリカンスタイルを模倣した。

が目玉の色を替へることは金輪際叶わぬ藝當。ビフテキにはビフテキの味が在ると同様、お刺身にはおさしみの格別の味があることを忘れたのか知ら？ はて面妖じや喃

×

正義が不義に蹂躪され、弱者が強者に踏みにじられる。夫れを世の全ての者が徒らに黙して忍ぶとすれば、希望なく光無き亡者の巢に外ならない。だが總べて生物には熱があり強力があり、そして反抗心がある。

壓えられたバネは必ず一度、その位置以上に跳ね返す力を秘している。

阿波之介の舍利塚

昆野秀賢

平泉中尊寺の有名な金色堂の左側に法然上人弟子阿波之介の墓所がある（別名舍利塚）此の阿波之介の墓所については、從來中尊寺自體もあまり宣傳して呉れなかつたし、宗門人としても愚鈍念佛の代表者として逸すべからざる存在であつたにも拘らず今日迄、遺跡の紹介を怠つていたことは誠に遺憾であつた。勿論その重大な責任は岩手教區自體にあつたことも否めない事實である。

そこで岩手教區教務所では去る四月十一日教區議會を平泉に隣接の前澤町専念寺に開催し會議に先立ち、午前九時より議員及び教務職員外有志等一同中尊寺に詣で阿波之介の墓前に御回顧し、終つて同寺文化部長、佐々木實高師より左の史實或は傳説を聞いた。

今から五代前の住持高遵の作になる「平泉雜記拾遺」には、

舍利塚 光堂側有

法然上人の御弟子阿波之介は、京都伏見邊

の者とかや、放逸邪見にして左と言ふことは

右と違ひ、右と云ふことは、左と云ひ人をたぶらかす曲者なりき、されども福貴自在にして七珍萬寶を持てり、常に大太刀を帶して往來しければ道行く人々恐怖して隠る程の者なりしと、或る時法然上人の御前に参りて、淨土の法門聽聞せんことを申す、上人も弟子達も恐れて言葉を出さざるに、熊谷入道、上人の御前に在つて「法力坊是れに居り候へば怖させ玉ふべからず」と云へり阿波之介「僻事をば計らず、もとどり押し切つて是れを剃り御弟子になしたび候へ」と云へば勢親房剃つてけり、袈裟衣を玉はり、出家の本意を遂げて淨土の法門を聽聞しけるに、嬉しさの餘り宿所へも歸らず所持の田島若干の財寶を七人の妻に分ち與へ一向に稱名相續し、上人に常隨給仕し待る、後東まの方に下り秀衡（清衡の誤り）の建立せる光堂の様に上りて西に向ひ合掌念佛百遍計り唱へ正念に往生しおはん

ぬ、里俗集り結縁の爲とて火葬しけるに骨悉く舍利になりければ拾ひ集め、塚を築きて是を舍利塚と云ふ（法然上人御傳記に詳なり）文政七年甲申八月（一二七年前）奥羽兩州の淨土門中より塚修復あり手洗水石など寄進す。

尙阿波之介の舍利塚前に建てられてある説明標には左の如く記してある。

阿波之介と申すは元陰陽師にて法然上人に隨從の徒弟なり諸國行脚の砌り、當山に詣で佛殿の莊嚴如法なるに感じ、淨土もまた斯くやと遂に當山に留り金色堂の佛前にて唱念往生せり、その體より舍利多く出でければ、此處に納めたり。

阿波之介の逸事

法然上人ある時弟子聖光に申さるゝ様は一、「源空（法然）の稱ふる念佛も阿波之介の念佛も共に同じく皆往生を願ふ念佛なれば全く同じきなり」と申されしと、一、淨土宗にて輪違の珠數（日課珠數）を用ふるは、此の阿波之介の發明なりと、（詳しくは勅修御傳、諸廻向寶鑑等にあり、

以上

勅修法然上人傳第十九の卷に阿波之介の記述がある。

「阿波之介と云ふ陰陽師、上人に給仕して念佛するありけり、或時上人かの俗をさして、あの阿波之介が申す念佛と、源空が申す念佛と何れがまさると聖光房にたづね仰せられけるに、心中にわきまふる旨ありと雖、お言葉を承りて、確かに所存を治定せんが爲に、いかでか、さすがに御念佛にはひとしく候べきと申されたりければ、上人ゆゑしく御氣色かはりて、されば年來日來淨土の法門とては、なにごとを聞かれたるぞ、あの阿波之介も、佛たすけ給へと思ひて南無阿彌陀佛と申す、源空も佛助け玉へと思ひて南無阿彌陀佛とこそ申せ、更に差別なきなりと仰せられければもとより存ずる所なれども宗義の肝心今更なるやうに唯だ尊くおぼえて感涙をもよほしきとぞ語り玉へける。

二念數(日課珠數)をしいだしたるはこの阿波之介にてなん侍るなり、かの阿波之介百八の念數を二連もちて念佛しけるにその故を人たづねければ、念珠の弟子ひまなく上下すればその緒つかれやすし、一連にては念佛を申し一連にては數を取りてつもの所の數を弟子にとれば緒やすまりてつかれざるなりと申しければ、上人聞玉へて「何事も我が心に染みぬる事には才覺が出でくるなり、阿波之介

極めて性鈍に、その心愚なれども、往生の一大事心に染みぬる故に、かゝる事をも案じ出けるなり、まことにこれたくみなりとぞほめ仰せられける……云々。

×

二祖聖光房へ法談の際、愚鈍念佛の引合に阿波之介が出てゐるから、聖光入門當時であつて、建久八年上人六十五歳前後に入室されたものと察せられる、そして東北巡教に出發された年代や、中尊寺金色堂前で入寂された年月等は全く詳でない。

隆寛律師撰の法然上人の秘傳には、上人の御庵室より「カゴオヒ」を肩にかけて東の奥に下りけるが、秀衡の建てたる光堂の縁にて往生云々とあるから、御流刑前に出發されたやうにも思はれる。若し讀者諸賢の中に右資料がおりでしたら御示教を賜りたいものである。

本春三月下旬、椎尾緣山法主本縣下御巡教の際、右に關し大體次のやうな御示教を賜つた。

「法然上人門下で正義を傳道したものは鎮西の聖光と東奥の金光、京洛では聖覺であつた。

聖光は元久元年八月鎮西へ金光は正治元年

上人の命を受けて奥州へ夫々宣教の途に就かれ大いに人間教として念佛門を顯揚されていた。建曆二年正月廿五日法然上人御往生の後、善導大師の般舟贊一卷が發見された、常隨給仕の勢觀房は、上人の満中陰を終へてから此の般舟贊と御遺訓の一枚起請文とを東西に巡教中の聖光と金光へ夫々使者を派遣して贈られた、約半年後に受取つた金光の如きは師の御往生を知ると共に御遺訓に感一入深く慈々淨信を高めたと傳へられている、此の金光への使者が阿波之介で使命を果しての歸路平泉中尊寺の金色堂に立寄り、此處に入寂せられたのではあるまいか、とのお説である。

何れにせよ入滅の年月日の詳かでないことは残念であるが、墓碑丈けは今尚ほ若むして安置されてゐる、幅約五尺奥行四尺位の周圍に高さ三尺位の石垣を積んで臺にし、その上に花崗岩の幅一尺長さ二尺五寸程の墓石に「南無阿彌陀佛」と刻まれてある。

希くは同信諸賢、東北本線平泉驛御通過の折御寸暇がございましたら御立寄り御參拜をお勧め致します。

尚阿波介史實について御遺詣の方に御示教をお願い致します。(筆者岩手教區長)

私と經典

海龍野眞

「藝術の使命は自然を模寫することではない、自然を表現することだ！ 君はいやしい筆耕ではない。詩人なのじやー！」

これは、バルザックの短篇「知られざる傑作」の主人公が、やゝともすると、畫という

ものの本領が、自然を、そのまゝ寫しとることであるという常識的な考から切り換えられない後進の畫家に云つてきかせる文句である。藝術は、自然を、一枚の紙、一連の音譜一個の木や石にそつくりそのまゝ再現することではない。一つの女像を畫くにしても、正確な遠近法を使い、光線と陰影とに注意した所で、「切抜き細工の人形」であり、「美しいからだに生命のほの暖い息吹きが通つてゐようと思えない」のである。天然色映畫や彩色オフセット印刷が無かつた昔でも、名畫家の畫ける墨一色の畫は、惻々として眞に迫り、生命の息吹を感じさせてくれる。畫かれてゐる山川草木の形は、肉眼に見えるものとは大凡異つてゐる。むしろ、目に映る全ての姿が、洩らさずに畫かれてあつたとしたら、それは所謂、寫生、否模寫に過ぎない。名畫家の精神に感じとられた美、そのものが、畫筆を借りて展開されてくるものは、一枚の葉、一本の木などの形を超越した神品である。長い年月と苦勞のこもつた一刷に、人は、木々の息づき鳥の囀り、花の匂を讀みとる。雪舟畫く所の山水畫、否山水に、我々の魂は抜け出て遊ぶ氣になつてしまふ。こうなれば、色、形は色形のもつ以上の意味をもつてゐる。松の

木の根より、上部の幹が太いからとつて、變に思う人はない。寫眞機は、なるほど、自然の姿を、形通りに寫しはするが、人間の心全てで捕えられるものとは異つてゐる。例えば人は遠方を注視するときは、近景は比較的ぼけて感じている。そうかといつて、寫眞機の光學的ピンぼけとはちがつて、いはば感覺的なピンぼけである。このように、自然の眞の姿は、眼球だけで捕えられる寫眞のようなものではない。心全體でみられるものである。その心が高まり、洗鍊されればされるほど、みた内容の表現は常識的な方則、形ではおさまらなくなる。自由の方法と形で表現される。

近代の繪畫は、その表現の自由を以つて、美を競つてゐる。ピカソなどの繪を見てみると、平凡な我々は、追付いていけない當惑を感じる。勿論、やれピカソだ、やれマチスだといつて目の色を變えている連中だつて怪しいものである。ピカソのものだから、マチスのものだから、これがいいのだらう位のものも多いにちがいない。巨匠といわれる人々はそれまでには、本来の靈感に加うるに、深い美の歩みがたたみこまれてあるから、一舉に近けないことも當然である。最近のマチス展

を見ても、彼が、今日の繪に至るまでは、確實なデッサン、習作が、幾枚となく作られ消され破かれているのがわかる。ピカソも確か今の自分の繪ばかり見たり、まねても、過去の私の道の跡をよく理解してしなければ無意味であると云つてゐる。

このことは、別の言葉でいえば、表現の自由を獲得した心の示してくれる手法と形式はそれだけのものではなくて、それらを仲立ちとして、その心、又は、その心にくりひろげられてある自然の姿、絶対にまで廻つて訪ねて欲しいということだと思われる。

だとすれば、一見奇異に見える直線と曲線のぶつかりあつた繪、色彩の洪水、いびつな人體、牛の胴の中に人が押合つてゐる繪、等の中にも、彼にしてなしうる表現の自由さに外ならないことに氣がつくと共に、その自由さに羨望の情を禁じえないのである。

私は靜かに、淨土・法華等の經典の文相を想い浮べる。素晴らしい表現の自由がある。マチス、ピカソに慕いよる近代感覺の上に立つ人々が、なぜ、この表現の自由を思うまゝに驅使された全文を非現實的な荒唐無稽のものと斷ずるのであるか。なるほど、今と昔、藝術と信仰、繪畫と文字、美と聖の區別はあ

るにしても、表現に於ては等しく自由ということに變りはない。まして、精神の奥底にまで立到り、人生の道標を示す經典にあつては浮動極まりある普通の云い方では眞が失はれてしまふ。

いろ／＼な經典がありますが、中でも般若經、維摩經等は寂、無の立場に於ける表現であります。何ら具體的なことばはない。否定によつてこれをこれと觀じうる人々の琴線に觸れて、眞の悟りの境地を伝えるものであり、佛教の一つの云い表わし方であります。

之に反して、とくに淨土の經典は、その理想態を我々の心に浮べることのできる全ての「形」と「ありよう」に寄せて顯しております。一言にしていいますならば、「莊嚴」を極めて淨土を畫き、我々に信仰の中心と力とを與えてくれる。

しかも、その「形」と「ありよう」は、現實のそれとは性質を異にして、讀誦するものをして、無限にして夢幻なる佛の境に遊ばせてゐる。

無量壽經に「淨きこと形なきが若し」とある。定めなき我心の趣く淨土は、形あるこの世のものではない。たゞ、此世を淨土にという考は、西方淨土とは一應區別して考えなく

てはならない。一言考談抄に、現實の世は、一つの舟の上のようなもので、艫に行き、艫に行つても、同じようにゆれ動くのであるという句があるが、ゆれ動く舟の上に淨土を立てゝもゆれ動くのであつて、魂のよりどころとしての淨土は西方久遠の彼方に一念に魂走せて、此を禮拜するのみである。つまり、現實の世の「形」を越えて、我々の淨土はある。

なるほど、後世、曼陀羅の畫とか、平等院其他、地上に淨土を映現しようとしたころみはあつたが、概して、支那風の「形」であり、又、現代を去ること遠いために、一部には、むしろ嫌惡、陰氣の情をもよおすものもなしとしない。

それよりも、かゝる時代の古びた、地域の異つた經の讀み方や解釋、受取り方より、今の我々が、我々なりに無心直接經の文相に、佛の正覺の無限であることを讀む必要がある。

木々は寶にして蓋はれ、池は池底に金沙を敷き、八功德水は滿々と滿ちて實相の波を揚げ、天には樂恒に奏せられ曼陀羅華雨ふり、鳥は晝夜別たず鳴くは法の聲であると説かれてゐる。恰も名匠の畫の各所にある色彩が、

互に呼應しあつて、絢爛たる美を奏するにも似ている。各々が我々の思慕する最高のものの姿を示している。

とくに淨土の經は、全體として一つの無限のたましいのより所を示していてくれるものだから、一々の形にこだわらず全體から一つのものを受取る心が大切である。

この經を讀むには、或は經の文句を一つ一つ噛みしめて讀むのもいいだろう、それには經本を開いて靜かに讀んでいくといい。二年前に讀んで得た氣持で、二年後の今とでは違ふこともありうるだろうし、時によつて、色々な意味を與えてくれるだろう。悲しみ、喜び、無反省失望等に應じて何物かを語る。又同じものを讀んでいても、或る所だけ強く心を引かれることもある。又、意味を直接に聞き分けずに、讀んだり聞いたりすることによつて教の尊嚴さを味うのもよい。之は所謂、誦經、誦誦の功德といわれるもので、經を讀むこと、それ自體の力である。恰も、一竿の筧を傳つて、靜かに寂寞の氣を瀾らせながら落ちてゐる清水の音のように、なんとなしにたゞそれだけで、しみじみと自然を感じ、さびを感じるようである。細かい理論も抜きである。又、一幅の名畫を見る時に、一々の色

や線とか題材の吟味を離れて味う如くである。一つの雰圍氣だけでなしに、自分——見るもの、讀むもの、聞くもの——の心を豊かにし、より大きなもの、目に見えぬもののあつたことを感じさせてくれる。

このように經は、ありきたりの形だけのものではなく、佛が自在無得に説き出でたるものであり、我々は、めい——に、受取り、次

たばこ二題

——或る旅館の主人の話——

お客様用の寢具や調度を揃えるということも、近頃ではなかなか大變なことになるまして、膳碗なども塗りの良い蔴繪のあるのになりますと、一揃い三千圓から四千圓もいたします。ところが、大勢さんの宴會の時など、お碗の蓋を灰皿代りになさつて灰を落す方があります。灰を落す位はまだよい方で、火のついた煙草を、そのまゝ蓋の上にお置きになる方があります。漆はチリチリにちぎれてはげてしまいます。もうそうになると、三千圓も四千圓もした揃い物が、ちやんとした席では使えなくなつてしまいます。そ

々の一期をかけて、佛意、信仰の理想を汲みほして行きたいと思う。よく、佛教、經典はむつかしくて、我々はとてもといわれる。しかし、一部インテリ階級の方に經は説かれたものであろうか。大膽に自己を飾らず、今まで育つてきた自分なりに經を讀めばいい。自己が深めば、又それに應じて經は何物かを教えるであらう。經を讀むものは自己である。

んなことがあつては困りますので、お一人お一人に灰皿をお出してあるのですが、その方はお使いにならず、お碗の蓋をお使いなさいます。税金も税金ですがこんな所に、見えない費用がかゝつて、自然宿泊料もお高くなることになりました。

——或る事務所の女給仕の話——

びつくりしましたわ、紙屑籠から急に火が燃え上つたのですもの。取り引きの事で來たお客様が、煙草の吹殻を紙屑籠の中に捨てたのですよ、随分亂暴ですね。紙屑籠の中には、謄寫版の原紙の書き損じが丸めて捨て、ありましたから、それに火がついたのですよ。恐いですね。

(不中庵先生雜記)

永遠のいのち (二)

佐藤良智

法藏ぼさつの願

法藏ぼさつは、いまだ、一介の求道者であります。求道者の御すがたの法藏ぼさつは、世自在王佛のみに於いて、身を苦毒のなかにおいても、精進して必ず、わが行を、成し遂げようという、鐵の御決意は、何んであつたろうか。法然上人も申されていますように一つには、み佛の國土を淨めること、二つには、衆生を完成せしめることであります。天地宇宙ありとあらゆるもの、み佛のくにに屬しないものはありません。み佛の國でありますから、本來、清淨である筈ですが、悲しい哉、われわれの、汚れた、弱いこゝろが、これを穢して居ります。一切ことごとく、本來のすがた、淨土に歸らねばなりません。歸さなければなりません。

また、生きとし生けるもの、みな、本來、佛性を持ち、佛である筈であります。しかし、罪深く、こゝろ弱きわれわれは、本來のすがたから、はるかに遠いところに居ります。穢れ、惱み、怠り、慢り、貪り、をろかに、決して、本來のよきすがたでは居りません。完成されては居りません。救われては居りません。み佛がいきとし

生けるものを救済し給うとは、衆生を、成就し、完成せしめ給うことであります。法藏ぼさつは、一求道者として、淨佛國土、成就衆生のおんため、全宇宙を言いあらわす、二百十一億という數多き國土から、無數の願いから、四十八の願いをえらび給い、これを本願としたもうた。社會を淨め、人類を救済する、これこそ、法藏ぼさつの願いである。法藏ぼさつのおんすがたを通じて、顯れた、深き、高き、永遠のおんいのち、すなわち、無量壽如來の御意志であります。一願として、人類の福祉を願わないものはない。第十三番目のみ佛の光明は限りなからしめたい、第十三番目の、み佛の壽命は限りなからしめたいの御願いも、三十一番目の國土を淨めたい等と願い給うのも、たとい、み佛や、みくに、に關する御願いであつても、もろびとの爲でないものはない。いわんや、もろびとのためにと願い給ふ四十三の願いは今更いうまでもなく、人類の仕合せのためでないものはない。四十八の願の第一をとつてみても、これを無三無趣のねがいとよぶが、わが國土に、地獄の、そうです、いろいろ、文學や、繪畫に現されているあのじごくのすがた、ありさまあの地獄のすがたが人の世にありませんか。いや、現實は、あの文學

や盡にかゝれているよりもむごい、じごくのすがたがあるではありませんか。第二の餓鬼のすがた。今度の戦争によつて、まさしくとがきのすがたを知りました。また、畜生、人間のこゝろのなかに畜生が住んで居ります。また、人間以外の畜生のあわれさ。これら三つのあしきすがたを、なからしめたい。ぼさつ、第一のねがいである。これ一つを見てもその願いの深さ、廣さがうかがわれる。われわれの、にちにちの願いの、何とはかなきものであることか。この四十八の願いみなことごとく、切々の願いであるが、この願いのなかから、尙、唯一つの願いを珠玉として、選び出し、選擇本願として、人類のいのちをかけられ、もろびとの救済のよりどころとされた。その願とは、第十八の願であり、その人とは、中國の善導大師であり、わがくにの、法然上人、及びその流れをくむ、もろもろのひじり達である。

第十八の願いとは、

われ、もし、佛となる時、十方のもろびと、一心に、願うて、わがくに、生れんと思ひ、乃至、十たび、念佛を申し、必ず、無量のいのちのみくゝに生ることができないならば、誓つて、覺りを得ることを、しないであらう。

これを、念佛往生の願とよんでいる。この一願は、まことに、他の四十七願を、内に包み、この一願の成就によつて、一切は成就できるのである。善導大師は、申し添えて居られる。

「行くも、とゞまるも、坐するも、臥すも、われらは、一時のひまなく、み佛のみひかりと、みいのちのなかに、いだかれ、はぐくまれて居るゆえに、一心に、専ら、大み親なる、無量壽如來のみ名を唱えまつれば、その無量壽のみくに、たれかれの別なく生れさせ給

う。このみひかりと、みいのちに、救い取らるゝものゝ仕合せさよ。これが歡喜でなくてなんであろう。この攝取のよろこびを、勇躍歡喜念佛と名づけ、踊りの念佛をすゝめた、市のひじりもあつたくらいだ。大いなる、み命に、抱かれ、育ぐくまれるものゝ、安らかさ、あたゝかさ、そこが、國土を淨め、もろびとを完成させる源であります。その故にこの願いを、王本願などともよんでいることの、まことさを知るのであります。

さて、法藏比丘は、これ等の四十八の願いを起し給うた後、更に詩文をもつて、重ねて決意を示し給うた。

その一は、われは、世に超えた願いを建てた。必ず無上の道に到達するであろう。永遠のいのちの、眞たゞ中こそ無上の道である。

その二は、われは、いつの世にあつても、大いなる施しの主となつて、こゝろまずしきものには、豊かさを、財乏しきものには富を與えん。地上の一切の貧しさを濟わすんばやむまい。すべての不仕合せを救済せずにはおかない。

その三は、われ、佛道を成ずるに到らば、即ち、生命の道に、眞實に流れ入るならば、その、ひゞき、十方に超えしめん。生命の河のひゞきは、たかなつてやまない。人々の深いこゝろの奥底に、そのひゞきは、鳴りひゞいて止まない。この三つの誓願に引續いて、珠のような詩句は續く、「もろびとのために、眞理の藏（法藏）を開いて、廣く、功德の寶物を施すであらう」と。「法藏を開く」との偈句がある、聞きのがすべきことばではない。法藏は、それ自らを、開く。蓮の花の如く。法藏比丘は、眞理の意志を、願として開き給うた。その花は開いて、やがて、佛果として、實つた。法藏は法華、即ち、眞理の華と咲き、無量壽・無量光の果實となつて、永遠に、

もろびとの救いの力となる。功德の寶を施すとはこのことをまさしく、言うのである。

發願し、誓願し給ひし法藏比丘は、その發願の華さく爲に、勇猛精進し給いて、倦むことなく、身に、口に、こゝろに、かぎりなき修行を積み給ひ、遂に、願いを成就され給うた。

法藏ぼさつ、本願を成就し給う

釋尊は、阿難尊者の問いに、答え給うた。

「阿難よ、法藏ぼさつは、今、すでに成佛して、現に西方十萬億土をすぎて、安樂と、名づける佛土にましまし給う」と。

本願は成就された。法藏ぼさつは、み佛となり給うた。しかも、十劫という、量り知られない以前に、佛となり給うて、今、現に、まします。

お經典は、續いて、今は、成佛されて、無量壽如來となり給うた、あみださまの御徳、及び、その住ませ給う、御淨土の有様について、美わしきことばをもつて、高く、深く、廣く、有難き極みを述べている。

あみだみ佛の、御ひかりについては、特に十二の御徳を讃え、また、その壽命の無量なることについて、更には驚くべき、莊嚴華麗なるお淨土の、寶樹、道樹、音樂、堂宇、寶池、天人、往生人について、讃えて盡きない。

無量壽如來の御徳を、永遠のみ命のおん徳をたゞえるに、どのような地上のことばをもつてたゞえても、たゞえきれない。(未了)

NHK・十二月・佛教の時間 (第二・午前六・四五一七・〇〇)

3日	倉田百三の信仰と作品 (1)	}	龜井勝一郎
5日	〃 (2)		
7日	物語 苦行の釋迦 (原作 増谷文雄)	劇 團 員	
10日	童 心	佛教童話研究家 内 山 憲 尙	
12日	佛教とユートピア (1)	}	對談 L・ブリンクリー 武者小路 實 篤
14日	一佛教の實踐 (2)		
17日	女 子 解 脫 一子女教育と佛教一	武蔵野女子學院長 鷹 谷 俊 之	
19日	新しきアジアと佛教精神 (1)	}	對 談 眞 高 野 良 正 富 順 子
21日	〃 (2)		
24日	BK佛說法滅盡經 (1)	}	天台宗宗務應教學部長 山 田 惠 諦
26日	〃 (2)		
28日	人生探訪 占筮と人生 (幸福を求める人々へ)	興津清見寺 古 川 大 航	
31日	今年の佛教界を顧みて	大東出版社社主 岩 野 眞 雄	

懺悔の心

新保義道

た、これからは怒りの心を起すまい。」と後悔の念に驅られ再びこのような怒を起すまいと誓うのであるが、又何かのことにつけ怒の心を起すのが人情である。貪りにしても、愚痴にしても同様である。

前念に惡をなし、後念に善をなす、
前念に善をなし、後念に惡をなす、
これが偽らざる人生々活である。

念佛者の生活も亦同様で、

前念に惡をなし 後念に念佛し

前念に念佛し 後念に惡をなす

のである。止め止めんと欲すれど止まざるを嘆かれ、「心をしづめ妄念をおこさずして念佛せんと思わんは、生れつきの目鼻をとりはなちて念佛せんと思わんが如し」と弟子を諭された法然上人。「何れの行も及びがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」の絶望から「たとい法然上人にすかされまいらせて念佛して……」と言われた親鸞上人を初め、妙好人と言われた人々の告白は皆、惡を止めんとして止め得ざるを述べている。

一部の人の間には、宗教はそれでよいのだ佛は慈悲心を以て惡業の我々を救済されるの

随つて犯すれば随つて懺悔する。と法然上人は選擇集の中に善導大師の文を引用して説かれてあるが、何と意味深き言葉であらうか。實はこれこそが上人の罪惡觀であり、人間自己を見つめた言葉であります。

私達の過去をふりかえつてみる時、そこにあるものは罪の連續である。併しこゝで注意せねばならぬことは罪と言う意味である。罪と言うものを三種に分類することが出来る。

即ち法律上の罪、道徳上の罪、宗教上の罪である。之を譬えて言へば、疊の上にある目に見える塵を法律上の罪とすれば、箒ではいて出て來たほこりは道徳上の罪であり、大掃除

の時に疊をたゞいて出て來るほこりを宗教上の罪と言うことが出來よう。従つてかゝる意味に於ては何人も法律上の罪を犯さなくても道徳上の罪はあり、假りに道徳的に完全な人であつても宗教上の罪のない人は無い。

我々は國法にふれる程の惡事を働かなくても他人に迷惑を及ぼし、我心を暗くしたことは教え切れない程である。このような我々の心を言い表したのが隨犯隨懺である。怒つた例をとつてみても、何かにつけて怒りの心は起つて來易い。併しその怒がおさまつた後はあんなことに怒らなくてもよかつたのに、怒つたばかりに自分も家族も不愉快な思をし

であるから、ことさらに惡を止め善を勵む必要はない。惡人正機の念佛の教とはこのようなものである。善を爲そうと努むること、宗教的に言えば戒律を守る世界は未だ道德の世界であつて眞の宗教の世界と言うことは出来ない、眞の宗教の世界はむしろ戒律を越えたものであると言う。言の如く信仰の世界へは戒律を守ることよりも、むしろ戒律の如何に守り難いかと言う自己の無力に目覺めたところから入つてゐる場合が壓倒的に多いのは事實である。併し合掌の心を以て佛の前に立つ者は戒律は守り得ないと一度否定したその戒律も、内心の叫びとして出來得る限り之に従がわんと努めざるを得なくなるものである。

それは救の爲の補助、成佛の爲の手段としてではなく、實に止むに止まれぬ内心の慾求である。

念佛の世界に生き、信仰の生活に生きる者は必ず自己の罪の深さに泣き濡れるのである。そして罪深き自己を念佛の中に懺悔し、再び惡を犯すまいと誓うのである。併しながら懺悔したその後から頭を擡げて來るものは煩惱妄念であつて、善心はさらに起らない。

併し同じく惡を作りつゝも懺悔する生活と懺悔をしない生活とは、その人間性に於て天地雲泥の相違があり、その惡の性質に於て所謂「あくどさ」と言うものがない。例えば私達の肌膚は一日々々と垢で汚れてゆくのであるが、それを毎日とまではいかなくとも時々洗濯をすればその汚なさにはたえ難いと言う程ではない。併し之を一ヶ月、半年、一年と洗濯をせず身につけて居つたならばその汚なさは常人のたえ難いものとなつてくるのである。惡業をおそれて一心に念佛する者に佛の救いはあり、惡業をおそれず、惡を惡と思わざる惡無礙の者には佛の救いは至らないのである。

現代は罪の意識が非常に薄くなつて、宗教上、道德上の罪は勿論、法律上の罪を犯してさえ自らの爲した惡行に對し懺悔、反省しない者が多くなつて來てゐる。

かつて檢察關係の人より次のような話を聞いたことがある。

或る青年犯罪者に對し、取調べも終り係檢事が。

檢「お前はこのようなことをして悪いと

思つていないのか。」

青「悪いとは思つていません。唯惡かつたのは運が悪かつたのです。誰もがこんなこと位はしているのに、私だけが發見されたのは私の運が悪かつただけなのです。」

と答えたと言うことで、その係檢事も啞然としたと言うことです。

この話は單なる一笑話として見すごすかも知れないが、我々自身が之と同じことをくり返してゐるのではないでしょうか。釋尊は二千五百年の昔、すでにこのような我々の代表者として韋提希と言う一婦人を取り上げて、經典に説かれてゐる。

印度マカダ國の國王ビンバーサラ王は、年老いても世繼の子がなく、國は隆々と榮えても之のみが苦痛の種であつた。或時相師が占つて言うには、

「今一人の仙人が山中にあるが、この仙人が死んだならば必ず王子として生れ代るであらう。」

と、王は之を聞き仙人の死を待ち切れずひそかに人を遣わしてその仙人を殺させた。する

と相師の言の如く直ちに夫人韋提希は王子を
みごもつた。月日がたち王夫妻及び國民歡呼
の中に生れ出た王子を阿闍世太子と名づけた
のである。王は早速相師に太子の將來を占わ
せると、

「此の太子は成人の後、必ず文王を殺し
て王位に即くであらう」

と、王は之を聞き、恐れて生れたばかりの太
子を高樓より地上に棄て殺そうとした。併し
太子は運よく唯指を一本折つただけで死なな
かつたのである。死ななかつたので父母は我

子のことゝて非常な寵愛の中に養育して來
た。太子成人の後惡友提婆にこのことを聞か
され父王を殺して王位に即くことをそゝのか
された。そこで太子は父王を餓死せしめその

母韋提希をも牢獄に幽閉してしまつたのであ
る。産みの我子の爲に幽囚の憂目にあつた韋
提希夫人には、天に訴え地に哭してもまだ足

らぬ苦惱の生活が始まつたのである。夫人は
釋尊に對し「この苦惱より救われる道を教え
給え」と願うのである。釋尊は夫人の心中を
哀れんで自ら獄屋を訪ねられる。釋尊の聖容
を拜した夫人は涙の中から最初に口をついて

出た言葉は、

「世尊、私は何の惡因縁によつて此の惡
逆無道な子を産んだのでございましょ
うか」

であつた。「何の惡因縁」と他に問う必要があ
らうか。我子阿闍世が生れて間もなく之を虐
殺せんとした自己の罪の深さを忘れて、徒ら
に「何の惡因縁」と自らの苦痛のみを他に訴
えて、過去を反省しようとせず、自らの罪を
懺悔しようとしなかつたのである。

この韋提希の言葉そのまゝが、私の日々の
言葉であり、この心そのまゝが私の日々の心
でないだろうか。そこには人としての正しき
道もなく、救も亦ないのである。

しかしこの韋提希も靜かに尊容を仰ぎ、慈
眼にふれて自らの罪の深きに目覺めた時、

「阿彌陀佛こゝを去ること遠からず」

の尊いみ教を受けることが出來、苦惱なき餘
生を送ることが出來たのである。

私達の家にしても、白木の板の間は毎日毎
日拭き清めても尙後から／＼塵ほこりがたま
つて來る。併し毎日拭くことによつて何時の
間にか得も言えぬきれいなつやが出來て來るよ

うに懺悔の後から後から罪つくりつゝも又懺
悔の生活を續けてゆく、隨犯隨懺の念佛生活
こゝに人間として避けることの出來ない罪惡
のまゝ、救われてゆく道があるのである。更
に法然上人のみ教は、人間の常として日々に
起る數えることの出來ない程の罪を一々自覺
し、懺悔することは不可能である。若し一々
を懺悔するのでなければ救われる道なしとす
るならば私の救われる道はない。それでは折
角眼前に降ろされた救の綱も、もう少しと言
うところで私の手が届かないのである。そこ
で無懺稱名を唱導されたのである。たとえ一
々の罪について懺悔出來なくとも、「罪深き人
間である」「あさましいことである」「あゝ惡か
つた」と折にふれ時にふれ、自己の醜さに氣
づいた時、自己のみにくさに懺悔の念佛をす
るよう勧められたのである。こゝに初めて私
如き人間の救われる道が開かれたのである。
同時に之を道德的にみても、社會的にみても
「惡をつくりて免れて恥なし」とする惡世相
は自ら正されて來るのである。言葉をかえて
言えば、道德的缺陷ある人間も、社會も、宗
教によつて救われて來るのである。



一向上人

——番場遊記——

大橋 俊雄

伊吹の秀峯が遠く車窓に現はれるともう指呼の間に、近江の國の半ばを占めると云はれる琵琶湖が見える。小島や半島、屈曲の多い琵琶湖は波一つ立たず、實に靜かで繪のような美しさで、この汀線に沿つて、鐵路は東へ東へとたつた一本走っている。京洛への旅の歸途、私は米原に下車して、五月雨煙る中を山が南北よりせまつて晝尚ほほの暗い山路をぬけ、又田園の間をぬつて里餘の捷徑を會つての中仙道の宿驛として名ある番場に急ぎ、蓮華寺を訪づれた。

北條仲時云々と記する石柱に導びかれて總門をくぐり參道を登ること約一町、兩側の畑地はもとの山内塔頭の名残りで、一二の農家が散見する外は一面の畑になつてかわり果てゝいる。更に十數棟の塔頭のありし日の面影を偲びつゝ中雀門に至れば、門の傍には聖徳太子御手植とか稱する觀感の梅が幾代目かの古本をのこしている。眼前の本堂は薔高く菊花の紋章未だに鏤として勅願所の傳灯誇らかに雨降る背景と相應しく俗塵を距てゝ大靜寂の別天地を劃している。時に寺後の八葉の峯にはつゝぢが一面に咲きかほり、滿山は紫一色につゝまれていた。

蓮華寺は昭和十七年、一向上人の六百五十年の遠忌を期に末山五

十余ヶ寺と時宗より淨土宗に歸屬したのであつた。その一向派は貞享、天保、明治と幾度びか淨土宗への復歸を企圖したのであつたが中々思ふにまかせず長らく時宗に所屬することを餘儀なくさせられたのであつた。その轉宗歸屬から今年で早くも十年になん／＼とする月日がたつている。それならば何故轉宗しなければならなかつたのかと云へば、一向俊聖上人は三祖良忠上人の弟子であつたにもかゝらず、自ら常誦の「十四行偈」の「道俗時衆等」の文によつてその一團を時衆と通稱し、諸國を遊行したことによつて江戸時代になつて時宗に所屬することを餘儀なくされたからである。藤澤の清淨光寺（遊行寺）は現在、時宗の總本山であるが此の宗旨を開いた一遍智眞上人も自からの教團を時衆と呼び、諸國遊行して念佛弘道に専念せられたのであつた。そのためには江戸時代の頃、徳川氏の宗教政策によつて當時教團としてよりよく整備せられていた遊行寺を以て時宗の本山とし、番場蓮花寺をもこれに所屬せしめてしまつたのであつた。今では時宗と云へば僅か四百余ヶ寺の寺々をもつにすぎず極めて微々たる存在であるが、曾つては——室町時代の頃には相當なものであり、一向衆もそれに劣らぬ程の勢力をもつていた

らしい。通常一向衆と云ふと、親鸞の流れを汲む浄土眞宗の東とか西とか云ふものを連想させるのであるが、この頃の一向衆は蓮華寺を中心とした一向上人の流れを指したものであつたらしい。親鸞の流れを指すものでない證據としては、大谷廟堂の相續問題の時、唯善は高田の顯智と云ふ人に、一向衆と云つて諸國を横行しているものが居るから、禁制しなくてはならないとか、又覺如と云ふ眞宗の僧も専修念佛をさかんならしむるためには一向衆と號する諸國遊行の輩と區別する必要のあることを強調しているのもその一例で、眞宗中興の祖と云はれる蓮如と人は延徳二年の御文の中に「夫れ一向宗（衆）と云は時衆方の名なり、一遍一向是れなり。其の源は江州番場の道場か是れ則ち一向宗なり」と斷案を下して居られるのである。この番場の道場と云ふのは述べるまでもなく番場蓮華寺のこと、蓮華寺と呼ばれたのは何時頃からであるか明らかではないが、一向上人傳によれば弘安七年頃からであつたらしい。もつとも太平記卷九の「仲時以下自刃の事」の條下には番場の辻堂とあり、その時の交名帳——元弘三年五月九日、南北兩朝に分れて戦亂があつたとき長驅西上した足利高氏及びその一族は六波羅探題を攻めた。その時、北條仲時は光嚴天皇、花園、後伏見の兩上皇、皇太子康仁親王を奉じて東下の途次であつたが、偶々擧兵した足利軍のために進路を阻まれて仲時以下四百三十二人は蓮華寺の堂上や前庭に於てはやこれまでと自刃を遂げたのであつた。この際陣歿した將士の姓名や行年を記した陸波羅南北過去帳には「馬場宿米山ノ麓一向堂」と記されていて蓮華寺とは書かれていない。

一遍と一向俊聖の行業はよく似ている。彼は暦仁二年に筑後國の竹野庄に誕生した。それは今を去ること七百十二年以前のことであ

る。俊聖の父は草野冠四郎永泰で、その兄永平は二祖聖光上人の大檀越で、善導寺創建にも力があつた武士である。七歳の時播州の書寫山に登つて天台教學を修めたが、十五歳の頃より天台による得脱の難きを悟つて、翌年の夏山を下り南都に赴き、更に廿一歳（正元元年）の春には鎌倉に良忠上人を尋ねて専修念佛の法を聞いたのであつた。こゝでその名俊聖を「一向に専ら彌陀の名號を念ずる」と云ふ經文によつて一向と改め、専修念佛の行者となり四大自本空の偈を結んで三十五歳の春遊行教化の旅に立たれた。

一向上人によれば元祖法然上人が専修念佛を唱導し、又關白兼實の請によつて選擇本願念佛集をも撰述せられ、將又臨終に際しては一枚起請文を認めて「たゞ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申して疑なく往生するぞと思とりて申外には別の子細候はず——一文不知の愚どんの身に尼入道の無知のともがらに同して、ちしやのふるまいをせずして只一向に念佛すべし」と行を本とした念佛（専修念佛）を明示されたにもかゝらず、その門下の幸西、證空、親鸞等は安心の領解を本とし、聖光、長西、隆實等は行門を本とした。一向俊聖と同門の中でも名越の尊觀や自旗の良曉などは、三心を具足して稱名すれば最初の一念に往生の業が成就するものである（尊觀）とか、業の成就と云ふことは各々機根に従つて早きものありおそきものあつて一定せず（良曉）と云つて一念業成論が堂々と論じたのであつた。かくて行より解に向つたとき一向上人は煩雜化に對する一種の還元運動として一向遊行義を分立せられたのであつた。彼は寶號（名號）に絶對價值を認めて、他の同門の人々のとつた學解をば全く放下し、自からは念佛行者として「此の寶號に何の不足あらんや」と云ひ、同異二類の助業さへも捨て去り、寶號の絶對境地を

體得されたのである。この實號絶對の念佛生活こそは生涯を貫き、立ち乍らにして念佛往生をなされたのであつた。

遊行の旅に出られた上人は、一遍聖よりも五年も前に宇佐八幡に踊躍念佛を修し、大隅正八幡への參詣は二年前である等、その行業に於て兩者はよく似て居り、且つ一向聖は一遍聖に先行しているのは注目すべきであり、遊行經路もほぼ同一の道程を辿つていゝのである。それならば兩者の間に何等かの關係があるやと云うに、時宗の近世資料が兩者共に聖達門下であると云い、又一遍門下に求むる以外は、六條緣起にも一遍上人繪詞傳や一向上人傳にも見當らないのである。若し強いて求めるとすれば、一遍聖が文永十年二月豫州を出立して宇佐八幡に參詣し、その秋に一向俊聖が此處で踊躍念佛を修しているの、この邊に關係を見るのではあるまいかと思ふ。

踊躍念佛は今では天童佛向寺に残つて、蓮華寺では開祖以來の長い傳統をもつたこの念佛様式は全くすたれてしまつた。傳によれば踊躍念佛は元曉が修したようであるが、日本では空也の鉢叩念佛が最初のやうである。次いでは一遍聖で、一遍聖繪卷七に「空也は我が先達なり」と云つて、踊躍念佛を修したのであつたが、一向上人は五年も前に始めたのであり、その念佛なされる態度について、「天踊躍念佛は佛願易行の大法に逢ひ、他力難思の往生を喜び、信心内に深く歡喜心に満ちて、忽念として他念を忘れ欣然として踊躍するなり」と述べられて居るが、この念佛こそは信心の厚きによつて歡喜が踊躍の形にあらわれたもので、念佛即踊躍となつたのであるが、遂にはこれを手段として念佛弘通、念佛結縁の作法となしたもので、一向聖の法をついだ禮智阿は「益會祖師忌には踊躍念佛、或行道念佛丁寧なるべし」と申されている。しかしこの踊躍念佛が念佛弘通の

上に大きな貢獻をあたえられたことは言を俟たないが、これが盛んになればなる程、立場を異にする人達からは非難の矢をあびたのであつた。或人は「偏に狂人のごとくにして」と評し、又「頗る江魚の渚に餌くらふが如く、又山猿の梢を捨ふに似たり」と言ふ人もあつた程で、加州金澤の一彌陀堂に於て踊躍念佛修行の折の如きは聖直僧三十人許りが一所に集り評議の上、經證を示せと詰つてゐる如きもそれで、彼等は「踊躍して念佛するよし、是狂人の業なるべし」とものゝしつたのであつたが、聞法の後はかえつて上人に歸依したのであつた。かくて念佛弘通に終始せられた上人は、弘安七年蓮華寺に入り土肥氏の歸依を受けたが、同十年十一月十八日世壽四十九歳を以て卅乍希代の往生をと作られたのであつた。

中雀門を入つた右手には鐘樓があつて弘安七年在銘の銅鐘がかけられていた。大檀那は沙門道日、勸進は畜生、畜能の由で、この兩法師は俊聖がこゝに一字を營まれる以前あつた法隆寺のあるじで、道白は彼がこゝに止住するに當つて蓮華寺の造營に力用ひた土地の豪族土肥三郎元頼の法名である。元頼の墓は本堂の前に苔むした寶篋印塔が六百年の長さ歴史を語るが如く風雨にさらされながら建てられていた。こゝの本尊は釋迦と阿彌陀の二尊並置で、彌陀は竹田如來と呼ばれている。こゝから一町許り登りつめた山腹に開山一向上人がねむり、さゝやかな五輪塔は在りし日の床しさを偲ばせてくれる。廟所に至る參道の左側には北條越後守仲時以下の六波羅將士四百三十餘人の小さな墓碑が行儀よく並んでいた。山腹の曾つて立乍往生を遂げた上人を茶毘に附した場所と傳える一向様を始めとして、一向關係のものは眞偽を問ふは別として極めて多かつた。

辨榮上人



中島眞孝

や傳記などを讀んで、知ることが出來た人々の間では、勿論認められて居り、尊敬されて居るのでありますが、モットモット廣く知られ、認められてよいと思ひのであります。辨榮上人は六十二歳を以て大正九年に歿くなられて居りますから、今年は上人の歿後三十二年になる譯であります。

辨榮上人は明治維新に先立つこと丁度十年の安政六年に、千葉縣東葛飾郡手賀村の農家山崎嘉平さんの長男として生れられました。

従つて山崎辨榮と云ふのであります。併し彼は僧侶であり、僧侶として優れた人格を持つて居りましたので、彼を知る限りの人々は僧侶に對する尊稱である「上人」を附けて「辨榮上人」と呼んで居るのであります。私もその風習に従つて辨榮上人と呼ぶことに致したのであります。

序

私が多年最も尊敬し、最も私淑して參りました人物が二人御座います。其一人は今年二月廿五日にラジオで「光を掲げた人々」の中の一人として、「現代の聖者、渡邊海旭」が放送されましたが、その渡邊先生であります。今一人は是れから御話致します辨榮上人と云ふ人であります。

辨榮上人と申しましても、或は御存じない方も多からうと存じますが、彼の良寛和尚の如きも、相馬御風氏などによりて廣く世間に紹介されてから、良寛和尚のことは随分廣く世間に知られる様になつて居ります。

辨榮上人に直接に接して、其の教を受けた人々、或は上人の著述

少年時代

辨榮上人は今申しました様に農家に生れたものでありますから百姓仕事の手傳をしながらではありましたが、當時ありました寺小屋に行つて、所謂、讀み、書き、算盤を習つたのであります。所が其教わり方が他の普通の子供と違つて居て、先生が新らしい所を教え様とすると『私が初め讀んで見るから、聞いて居て下さい』などと云ふて、行きなり教わることを嫌いました。手習などは早く書き上げて終つて、其の時間の大部分は、畫を描いたり樂書などをし

たりして居りますので、先生も「此の子供は始末におえない子供だ」とこぼして居たと云ふことでありました。

十八、九歳の頃になりますと、体は達者で力は強い、百姓仕事にかけても一人前所か、米を搗けば二人分は拂取る、普通の人が六斗の米を搗く所を二俵も搗く、時には三俵も搗くことがある、と云う有様で、如何なる勞も厭はない、仕事にかかれれば側目も振らない。後には分擔を決めて、仕事が進み次第、家に歸つて讀書すると云ふ有様でありました。

此の間に學問の方もどん／＼進んで論語、大學、中庸などは殆んど暗記して終ひました。所が彼の家にある書物も、寺小屋の先生の所にある書物も、僅かなものでありましたので、近所の寺から借りて來ては、讀むのでありました。寺から借る本でありますから、其の中には普通の漢籍もあつたのでありますが、佛教に關する書物即ち佛書が多かつたのであります。従つて此の佛書の影響を深く受けられた様でありました。

此頃から普通の人と違つた何か特別な天分とでも申しますか、一種獨特な才能を持つて居られました、少さな米粒やゴマ粒などに極めて細かい文字や畫などを描くことを始められました、ゴマ粒には天照大神とか八幡大菩薩とか春日大明神などと書いて楽しんで居られました。

出家

段々佛教に關する書物を讀んで行くうちに、佛教に興味を持つ様になり、又名僧知識と云はれる様な、人々の傳記などを讀んで行くうちに、自分もそんな風な生活をして見たい、出來れば坊さんにな

りたい、と考へられました、で遂にお父さんの許を得て、程遠からぬ小金の東漸寺の靜譽大唐上人と云ふ方に就いて、髪を剃落して坊さんになりました。

こうして坊さんになつて寺に入つた辨榮上人は朝は何時も四時には、もう起きて本堂で讀經念佛、晝間は寺の廣い境内や、本堂の掃除などで、寺の仕事は仲々多かつたのであります。夜は大唐上人指導の下に佛書を讀み、佛教の研究に没頭されました。それが深更にまで及ぶのであります。庫裡の二階の北向の部屋で、冬などは、障子の隙間から吹き込み、北風を身に染みて、火鉢もなく、小さな豆ランプの下で、讀書研究するのであります。疲れて睡くなれば線香を腕の上に燃して、睡氣を拂つて、讀書を續けると云う熱心さでありました。寺の中でも誰が寝る時も、まだ起きて讀書して居る。それで居て、誰が起る時も、もう既に起きて、本堂で念佛の鐘を響かして居ると云ふ有様でありましたから、師僧の大唐上人も「辨榮は寝ないのだらう」と云はれた位でありました。

東漸寺に於いての勉強が、一通り終りましたので、東京に出て、佛教の研究を進めることになりました。東京に出られた辨榮上人は廣く佛教各宗の碩學、高德と云われる方々を尋ねて其講義を聴き、教を受けられました、併しそれは單なる物好きからではなく、又所謂佛教學の研究の爲めでもありませんでした。上人の求められましたのは、眞實一路の、解脱の道、如來への道で、あつたのであります。それでありますから、多くの學者の説を聞きましても、それを鵜呑にする、などと云ふ様なことは、全くなく、眼を閉ぢて冥想し、熟考し、よく考へて、其の學者の説かれる所と、御自分が理解して居ります所とを、よく照し合せまして、取るべきは取り、捨て

るべきは捨てると、云ふ風であつたのであります。

行の念佛

辨榮上人が佛教を研究されます態度は、所謂文字の上の研究ではなく、文字に顯はされて居る奥の眞の意味、即ち眞實義を追求されて行かれたのであります。而も、それを心の上で理解するばかりではなく、自分自身の體の上で立證して行かうとされたのであります。即ち釋尊の説かれた道を心で理解するばかりではなく、體で理解しようとされたのであります。經典を眼で讀まず、體で讀まうとされたのであります、それは、實に尋常一様のことではなかつたのであります。

一體自分に斯様なことが出来るであらうか。それには、先づ、第一に體と意志とが、確固として居なければならぬ、と上人は考へられ、東京から故郷に歸られて、お寺の境内にある、藥師堂に籠つて三七廿一日の修行をなさいました。其修行の間に、合掌した腕に、蠟燭を立てたり又は線香を横たえて如來様に供養し、其蠟燭、其線香が燃え終ると、更に又新しい蠟燭、線香をあげられるのであります。又或る時は、掌に油を盛り、是れに燈心を浸して火をつけて如來様に燈明を捧げられました。其時の火傷の跡は、上人の掌に、いつまでも見られたのであります。

此の様な難行苦行の後、辨榮上人は愈々茨城縣の筑波山に二ヶ月の念佛三昧の修行に入られました。筑波山の山頂から、凡そ二百米ばかり南の方に、立身石と云ふ巖窟があります、此の巖窟のなかへはいられて、晝は一心に念佛三昧、夜は岩の上に出て禮拜されるのであります。一日の稱名念佛、十萬邊でありました。心を靜めて

念佛を申して居られますと、或時には、四邊寂として聲なく、山全體が我體の様になつたこともありました、或時には、蛇が膝の上に悠々と這ひ上ることもありました。又猿が來て、無心に戯むれると云ふこともありました。食物と致しましては、少量の蕎麥粉と、水とで、飢を凌いだのであります。

二ヶ月の修業を終つて、山を下りて來られた辨榮上人の姿は、法衣は破れ、體は瘦せ、顔には垢が付き、髪の毛は茫々と延びて、異様な姿でありました。併し、此の二ヶ月の念佛三昧の修業によりまして、辨榮上人は

「宇宙はこれ如來の體である。

一心に如來を念ずれば

如來も我も是れ一つである。

覺り來れば如來のみである。

と云ふ大境地に入ることが出来たのであります。それも、知的に理解し、心で解つたのではなく、體で解つたのであります。

一切經拜讀

筑波山から歸られた、辨榮上人は、老師大唐上人に仕へ、寺の仕事も、前と同じ様にやり、讀經念佛に勵んで、居つたのであります。だが、餘程以前から、釋尊一代の教の記されてある、あの一切經を一度は、是非、讀んで見たい。そして、佛の道を明かにしたいと念願して居られました。或日、このことを老師上人に申し上げますと、老師は『それは結構なことだ、是非お讀みなさい』と申されましたので、上人は喜び勇んで一切經讀誦に、取りかかられました。それは上人廿五歳の時でありました。

一切經は、經律論の三藏に分れ、卷數にして、七千三百三十四卷と云ふ大部のものであります。上人は、外部との交渉を一切斷ち切りまして、精進に精進を重ね、専心、經文の拜讀、即ち閱藏に従事されました。一卷、また一卷と、倦まず、撓まず、拜讀いたしました。夜となく、晝となく、大聖釋尊の、あの大精進、あの大慧命が經文を通じて、上人御自身の脈博に、波打ち傳はつて來るのを覺えるのでした。かくて殆んど滿二ヶ年で、此の七千三百卅四卷の、一切經を、讀み終ることが出來ました。

斯う御話いたしますと、上人は、樂々とあの大部の經典を讀了された様に聞えますが、決して左様ではありませんでした。流石の上人でも、時には、晝に次ぐ夜の閱藏で、眠氣を催して、來ることも御座いました。そんな時には、御自身の脉に、小さな双物を突き刺して、其眠氣を拂つたこともあつた、と云ふことであります。

此の滿二ヶ年、閱藏致して居ります間に上人が多年教養の御恩を受けました、大唐上人は、病氣で亡くなられました。其時には、恩師に對する報恩の誠を擲てまして、百日間の、別時念佛を勵められました、其間は、横になつて寝る、と云ふことは致しませんで、座を起たれたのは、只便所に、行かれる時丈けでありました。其の百日の別時念佛を勤め終つて、再び、勇氣を起して、閱藏を續けられたのであります。

善光寺建立

亡なられた大唐人は、兼ねて千葉縣習志野の開墾地、五番六實と云ふ所に、其の土地の、人々の希望に答へて、善光寺と云ふ新しい寺を、創立する計畫を立て、それに努力して居られました。併し

それが實現されずに、亡くなられたのであります。

一切經の拜讀を経られた辨榮上人は、此の恩師の遺志を繼がれて善光寺建立の事業に、身を打ち込まれました。其時の歌に

『法の師の惠の海に、捨て小舟

身を荒浪に、よしとくとも』と

堅い決心で、此事業に向はれました。

併し、此新寺建立の事業は、上人にとつては、只新しい寺を立てると云ふ丈けのことではなかつたのであります。新寺建立の、資金を、勸募して歩きますと同時に、それを機縁と致しまして、廣く、如來の御惠みを傳へ、念佛の教を弘めることが出来る、と云ふことが、又なく喜ばしいことであつたのであります。従つて、成るべく多くの人々に、佛縁を結んで、教を弘めながら、其當時のお金とは云え一錢、二錢と云ふ零細な寄附を仰ぐ、と云ふ風にされました。それでありますから、多くの人々が、集まつて居る席などでは、お話の後で、念佛を唱へながら、米粒に『南無阿彌陀佛』の名稱や、般若心經などを書いて、與へられなど、致しました。

斯うして、集められたお金も、勸募の巡行の途中で、時に、著しい困窮者に、逢いますと、それを、全部施して終つて、又、新たに壹錢貳錢から初められる、と云ふ風でありました。

上人御自身の生活は、極めて乏しいものであります。或る朝、早く、訪ねて來られた人が、上人のお頭の上に、藥切が着いて居るのがあまり可笑しいので、それを申しますと、上人は『此頃は寒さが強いから、藥を着て寝ますので』と何喰はぬ顔をして居られます。

或る、人が良い下駄を差上げ様と致しますと、上人は『坊さんに

はよいものは要りません』と辭退されます。

或日、信者の一人が、訪ねて見ると、上人が何か、白い汁を煮て居られます。それで、信者が『それは何ですか』と尋ねますと、上人は、『これは、白米の磨ぎ汁です、お米の方は、昨日、お客様が來たので、出して終つたから、今日は其の磨ぎ汁を飲んで居ます』と申されました。

こんな話は、數限りなく御座います。

斯う云ふ風に、上人は、御自身の生活は、極度に節約致しまして六年と云ふ、長い間、殆んど無數と云ふてよい、多數の人々と、結縁し、零細な淨財を、集め、積みまして、遂に善光寺本堂は建立されました。

佛 蹟 參 拜

偕而、善光寺本堂建立の事業は、完成致しましたが、辨榮上人は其所に、落付いて居られることは出来ませんでした。善光寺本堂建立の、資金勸募の行脚が因縁となりまして、各所から、招ねかれまゝ、其の範圍は、千葉、埼玉は勿論のこと、東京、神奈川、静岡にまで、廣まつて参ります。そして、因縁に任かせ、乞はれるまゝに各地に教を説いて、歩かれました。斯様に、教を説いて、歩かれ乍ら、上人御自身、教主釋尊に對する思慕、憧憬の念は、益々高まつて参ります。遠くても、一度は、あの印度に渡つて、釋尊、悉達太子がお住みになつた、靈蹟を訪ねたい、そして、自分の信心も、固めたい、と念願して居られました、併し、省れば、自身は、一介の貧僧です。此の止むに止まれぬ、悲願は、何日、遂げられる的もありませんでした。

所が、上人の、此の切なる悲願を、漏れ聞いて、其の費用に、當てる爲めにと、應分の淨財を、上人に差上げる信者も、段々、出て参りました。そして、それ等の人々が、相談致しまして、『佛蹟復興會』と云ふものを作りまして、上人の佛蹟參拜を、後援することになりました。

一方、上人は、乞はるるままに、因縁に任せて、西に東に、或は北に、傳道の行脚を、續けられました、そして、遠く新潟、富山、北は遙かに、北海道にまで、巡教されたのであります。

佛蹟復興會の方も、段々と、成績が上りました、それで、上人三十六歳の時、愈々、印度に、渡られることになりました。

上人が、乗られた船は、フランス船でありまして、日本人としては、上人の他には、一人も居りませんでした。併し、上人は船の中で、例の米粒や、大小の紙、絹地、などに『南無阿彌陀佛』の名號や、畫を書いて、外國人に、おやりになりましたので、言葉は通じませんでした。佛縁を結ぶには、充分でありまして、船中での、人氣になられた、と云ふことであります。長い航海を終りまして、印度のカルカッタにお着きになりました。其處では、ダンマパーラ師にお遇ひになり、佛蹟復興のことなど、話し合つたのであります。愈々、釋尊成道の聖地、佛陀伽耶に參拜されまして、そこで一夜を明かされました。其時の歌に

『久方の浪路はあれど、三千とせの

昔を今に、するよしもがな』

海を、遙るゝ越えて來て、三千年の昔、釋尊が此所で、悟を開かれたことを憶ひ、其の教に従ふ、上人の感慨は、如何に深かつたことでありませう。

尼連禪河の邊に立ちましては、釋尊の時代から、晝夜を分かつた、流れ去り、流れ来る、水を眺めて

『我法は、なぞかくばかり、なりにけむ』

尼連禪河の、流れつきせで』

水は、斯くの如く、同じ様に流れて居るのに、如何して、此の釋尊の御國には、尊い御法は、後を絶つて居るのであらう、と悲しまれ

もするのでした。それから、釋尊が、初めて説法された毘野苑、釋尊入寂の地、クシナガラ、にも參拜され、釋尊に因縁淺からざる祇園精舎も御訪ねになつたのでありましたが、何れも、皆、荒れるに任かせた廢墟となつて居るのを見まして、寂しく、悲しい思を、されたのでありました。

印度に於ける佛蹟參拜を終えて、日本に歸られました上人は、上人が、親しく、佛陀伽耶の聖地から、持て來られた、土を混ぜて、小さな釋尊像を澤山造られました、各宗の本山に納められ、又多くの有縁の人々に頒かたれたのでありました。

誠實の上人

印度の佛蹟參拜から、歸られた上人は、矢張り、五番の善光寺に、落付いて居られることは、出来ませんでした。關東、東北地方は勿論のこと、教線は益々延びまして、今度は關西、中國九州にまで及びました。東京に居られますと、學生達も、道を求めて來る者が段々多くなりました。

上人は、お寺でも、在家でも、構はず、乞はれるまゝに、招かれるまゝに、何所へでも行かれたのでありますが、上人は常に寡言、謹嚴で、あまり、口はおきゝにならない、殊に世間話などは、絶対になさらない。朝起きてから、夜寝るまで、全く如來と共にある、

紹 藤井實應著

病む人へのおとづれ

佛教文庫七、東成出版社
文庫版 八六頁 五十圖

藤井實應師の名は本誌の讀者にはもう離れがたい親しみがあると思う。本誌にも深い信仰から溢れ出た餘滴を寄せられているが、師は人も知る淨土宗隨一の布教家である。寺という殻を背負うと邪魔になるのが、不住にして飄々と日本全國有縁に隨つて此教の旅をつづけられる今様西行である。

ここに紹介する著者、私自身病床にてこれをひもといたせいか、或は私の不調を聞知して師がわざわざ送つて下さつたものか、とに角一しおの感動を以つて讀むことが出來た。よくいわれる言葉に佛教は「死んだ者のた

めのものではないというのがある。正しくその通りであるが、人は仲々平常では宗教に入りにくい。矢張り何かのきつかけが必要である。死はその最も端的なものである。これに次ぐものは、死を豫想させる「病氣」。藤井師はこの病氣を以つてむしろ信仰入門の契機とされている。病んで始めて健康の有難さを知る如く、病んで始めて佛光の遍照を感じしめよ。

子規と百三の體驗記を肩頭、諄々と説き來り説き去る、病人の心、病人の悶え、病氣を通して保られる獨得の味。實例を豊富に引いて、その間に師自身の烈々たる信念を輝かすこの一書を弘く病床に呻吟する人、近親に病人を持つ人、そして病人に接して佛教の生きた道を拓かんとする方々におすすめしたい。

(竹中)

生活でありまして、獨りで居られます時には、佛書を讀んで居られるか、佛畫を描いて居られるか、或は又信者へ宛てゝの、信仰の便を書いて居られます、人に對して居られる時は、必ず、如來様の話。

その話が途切れると、上人は『一緒に動機を致しませう』と仰言る。寸時の隙ありません。それで居て、何所か温かみがあり、特別に、何と云ふことはないのですが、何か、斯う、フンワリとした、寛いた、大きなものに、抱かれて居る、と云ふ感じでした。上人の姿の、見える處に居りますと、何か、斯う聖らかな、安らかな、氣持で居られる、上人の姿が見えないと、何となく、空虚な、寂しい感じがするのであります。それでありまして、一度、上人の御宿をし、上人を御泊め申した、家の人々は、二三日も経ちますと、大抵上人の信者になつて終う、と云ふ風でありました。

光明主義

こんな風にして、各地を、傳道して歩かれたのでありますが、其間、常に、念佛三昧の中に居られ、思索に思索を重ねて居られましたので、上人の思想は遂に一つの大きな展開を見たのであります。

元來上人が説かれる所は、上人御自身が、實際に體驗された、そのまゝの事實を、事實として、話なされたのであります。従つてそれは、釋尊が説き残されたものとは、限らないのであります。

上人は元來淨土宗の人ではありませんでしたが、その説かれる所は、色々な他の宗旨に亘ります。そればかりではない、場合によりては、基督教でも、儒教でも、其他の聖賢の説でも、必要とあれば、科學でもそれが眞實の事實である限り、上人は、自由に、お用ゐになりました。それ等の諸々の説は、上人から見ますと、その説が、完全であ

るか、不完全であるか、又は、全體觀であるか、部分觀であるか、の違いはありまして、要するに、同じ一つの『月を指す指』と見えるのであります。そして、その月を指す指である、佛教の所謂大乘、小乗、或は、聖道、淨土と云ふ色々な教は、勿論のこと、廣く古今、東西の思想、現代の科學、などまで、皆、上人の體驗を通じて秩序よく綜合統一されて來たのであります。そしてそれはやがて、『光明主義』となつて現はれて來たのであります。然らば上人の思想の新しい展開である。『光明主義』とは、如何なものであるかと申しますと、光明主義に於きましては、信仰の客體である、如來を、必ずしも、西方十萬億の彼方、遠方に置きませんで、十方法界悉くが、皆、活ける如來の、大心光明でありまして、私達衆生は、色々な煩惱と云ふ、障害がある爲めに、その光明を、知見することが出来ない、見ることが出来ない。若し、私達衆生の信心が、透徹致しますならば、如來の光明と、私達衆生の信心とは、三昧一致して、如來の光明を發得することが出來ると云ふのであります。これが上人の説かれる光明主義の要旨であります。

上人は「如來」に就いて、斯う説かれます。如來は、獨尊、統攝、歸趣であり、唯一不二ではあるが、私達衆生の爲めに、三身に分かれて、おいつくしみになる、即ち法身、報身、應身であります。

○法身は、一切衆生を、産みなす、大ミオヤであつて、其の大ミオヤの力と、惠(めぐみ)とによりて、天地一切の萬物は、行はれて居るのである。

○報身は宇宙最高の所に在して、法身である大ミオヤから、産みなされた人が、信心念佛しますと、それに對して、恩寵の光、即ち惠みの光を與へて、これを攝化し、靈化して、永遠の生命として下

さるミオヤである。

○應身は、此の教のミオヤ、即ち釋迦牟尼佛である。此三身が一つになつて三身即一、或は三身一如の大ミオヤとなるのである。此の大ミオヤの恵、光を頂く爲めに一心に念佛を唱えるのである。

辨榮上人が唱えられるところは、大體斯う云ふことになるのであります。

上人は、此の光明主義と云ふ、一の新らしい宗教、とも云ふべきその信仰を、廣く宣布する爲めに、「光明會」と云ふものを組織されました。其光明會の趣意書の一節に

「佛陀の教に、信賴して、信念、功を成す時は、必ず、靈的光明に觸れ、無明の夜あけて、光明界中の人となる」と述べられて居ます。其の『信念功を成す』方法として念佛を唱えることを勧められ上人御自身も亦爲に絶えず念佛されたのであります。

上人は、此の光明主義を、廣く、世に、宣布する爲めに、本當に不惜身命、命がけて努力されました。上人は、或時申されますに、『古來の大宗教家は、その主義の爲めには、度々、流罪にされたり獄屋に入れられたりした。辨榮は不徳にして、未だ是れを経験しない』と述懐されましたが、上人の覺悟、決意の程が窺はれると思ひます。

やがて、上人は、『光明禮拜式』と云ふ勤行式を作られました。此の勤行式は、普通の佛教の經文を、和文に書き換えたものではなく上人御自身が、體得して得られる信仰を、各地に於いて、社會各層の人々に對して、實際に説いて歩かれた、經驗に基付いて、「今の時代に適合する様に、新らしく作られたもので、全く上人の獨創によるものであります。文句は簡單ではありますが、洵に、高雅な調子

を持つた、含蓄の深いものでありまして、信者がこれを朝夕讀んで居りますと、本當に盡きることのない信仰培養の泉となつて居るのであります。

上人は此の『禮拜式』を持て、日本全國、時には、朝鮮、滿州にまで行かれました。熱心に、布教されました。信者の數も段々増へまして、各地から、招請がありますので、上人は、全く文字通り、席の温まる暇もなく、極暑の夏も、嚴寒の冬も南に北に、西に東に傳道の旅を、續けられたのであります。

大正九年には十月十一月の二ヶ月に亘りて、新潟縣の各地を廻られ、柏崎の極樂寺に、開かれました。五日間の、別時念佛三昧會の指導に行かれました時には、相次ぐ傳道の過勞の、爲めでありませう、大分、健康を害されて居られました。それでも、お勤めになられました。三昧會の、最後の日には、床の上に、座つて、説教されました。三昧會を終りましたから、上人の病は、益々、重くなりました。十二月に入つて、その四日、多くの弟子達、信者達に、取り巻かれて顔は、平常より一層輝き、幽かではありましたが、深い聲で、唱えられた『南無阿彌陀佛』の聲が、聞えなくなりました。時呼吸切れて、眼は、永久に閉されました。

かくて、早くから、如來の光明を求められ、幾多の、困難な道を通つて、其の光明を體驗され、遂に『光明主義』を打ち立て、その宣布に、身を捧げられました。辨榮上人は、逝かれましたが、やがて、上人の祈念されました光明の生活は、如何なる形に於いてか、此の世に、此の社會に、實現される時が必ず來ることを、私は確信致して居るのであります。(筆者・大正大學教授・芝高校長)

芝園だより

◎菊の薫る朝、庭を前に、本年最終の後記を綴る。何と起伏波亂の一年たりしことよ。同時によくぞ生き通し得たこの一年。

◎全国にひろく呼びかけた本誌の實狀に應えて、有縁の方々の多大の申込みを得つゝある。綽尾をかざるにこよなきおしらせ。是非皆様の至大の御援助を。

◎久しく外氣に觸れず専らの静養に、芝園かいわいの狀勢をお傳えし待ぬのが残念だが、これは龍海氏にお願いする。

◎どうか皆様よいお年を。私自身も來年を期してもうしばらく自重致します。(竹中)

◎颱風來らず淨土遅るといふか、先號は電休のため校了後二十日もかゝつて出るという有様であつたので、止むをえず今回は合併號として時をかせぐことになつた。

◎おかげでひんびんと讀者各位の苦情と催促が舞込む、恐縮し反面

嬉しく思う、編者の心。

◎新年號から、誌面に清新の空氣を吹きこむべく目下努力中に付、期待されたし。

◎本號は傳記中心に編集された。辨榮上人は先般NHKより放送された。本宗近代の高僧として、その生ける信仰・光明思想とともに我々の知らねばならぬ上人である。阿波介の墓の話は他所にも傳えられるが、從來餘り紹介されなかつたことである。このような淨土ゆかりの話あらば、どしどし御投稿下さい。

◎彌陀の存在については、久しぶりに、正面から本質と取りくんだ味わいのある話。各人がある所ある所で淨土の問題を考える所から教は次々と生きて來る。

◎此頃、皆様なじみの方の放送がしばしば行われる。眞野、中島、内山、高橋、安居各氏等。時間にはダイヤルをひねつて下さつた事と思う。

◎九月號所載の三河大樹寺の由來

は此程岡崎だよりの時間に佐山氏自ら放送されていた。

◎十月の宗學大會は盛會に終了した。將來の宗學は如何にあるべきかという題目の討論會が持たれたが、誰しも此について考える點は同じである。問題は、しからば如何にするかという具體化に存するのである。

◎吉田絃二郎先生にはいつも本誌に御好意の玉章を頂き感謝に堪えない次第であります。今度、法然上人の戯曲を御執筆中の由、完成の日が待たれる。(龍海)

維持會員芳名(敬稱略)

久保愛之助(鎌倉)
漆間正徳(岡山)
入山大承(静岡・二ヶ年)
大西君三(神戸)
熊野與右衛門(福井)
渡邊慈廣(福島)
誌上厚く御禮申し上げます。

誌代値上げについて

本號より會費半ヶ年二百圓、一年四百圓(〒共)毎號三十圓二十四圓、但し、本號、次號のみ増頁に付四十圓。此れまでのお納め願つた前金も、本號より、この割で引かせて頂き前金切次第清算通知申し上げます。

「淨土」 十二・十三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年十二月廿五日印刷
昭和廿六年十二月一日發行

(本號特價四十圓)

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費半年金二百圓(送料共)

大正大學教授

佐藤賢順著

信仰への導き

B五半截 十六頁
一部 七圓

近來ラヂオに講演に縦横の活動をつゞけられる著者が
想を練り、思いを新たに、信仰の眞實なる姿と之
れに至る道を平易簡明に説き明かした絶好の信仰入門
書。

藤井實應著

一枚起請文

B五半截 十六頁
一部 七圓

浄土宗布教の第一線に活躍されている筆者が、特に本
會のために、宗祖信仰の實質を從來の型を脱して新し
い思想と深い信仰の上から、懇切に指し示めされた、
念佛信仰者必讀の小冊子。

東京都港区芝公園五ノ一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

今回、浄土トラクトと並行して、低廉、簡明、
輕便な

「浄土信仰シリーズ」

を發刊致しました。

講和の秋、傳道の好季。

是非奮つて御申込みをお願い致します。

お十夜

藤田寛雅著

參詣手帖(お塔婆、お墓、位牌、お珠數、法事)

前田龍海著

續刊豫告

五重の話

大野法道著

お經の話

佐藤密雄著

お念佛

佐藤賢順著

御先祖

中村康隆著

おつとめ式

佐藤良智著

體裁 文庫版 四頁

定價 一部二圓

百部以上 一圓八十錢
三百部以上 一圓五十錢

送料 五十部迄八圓 五十部増毎に八圓増